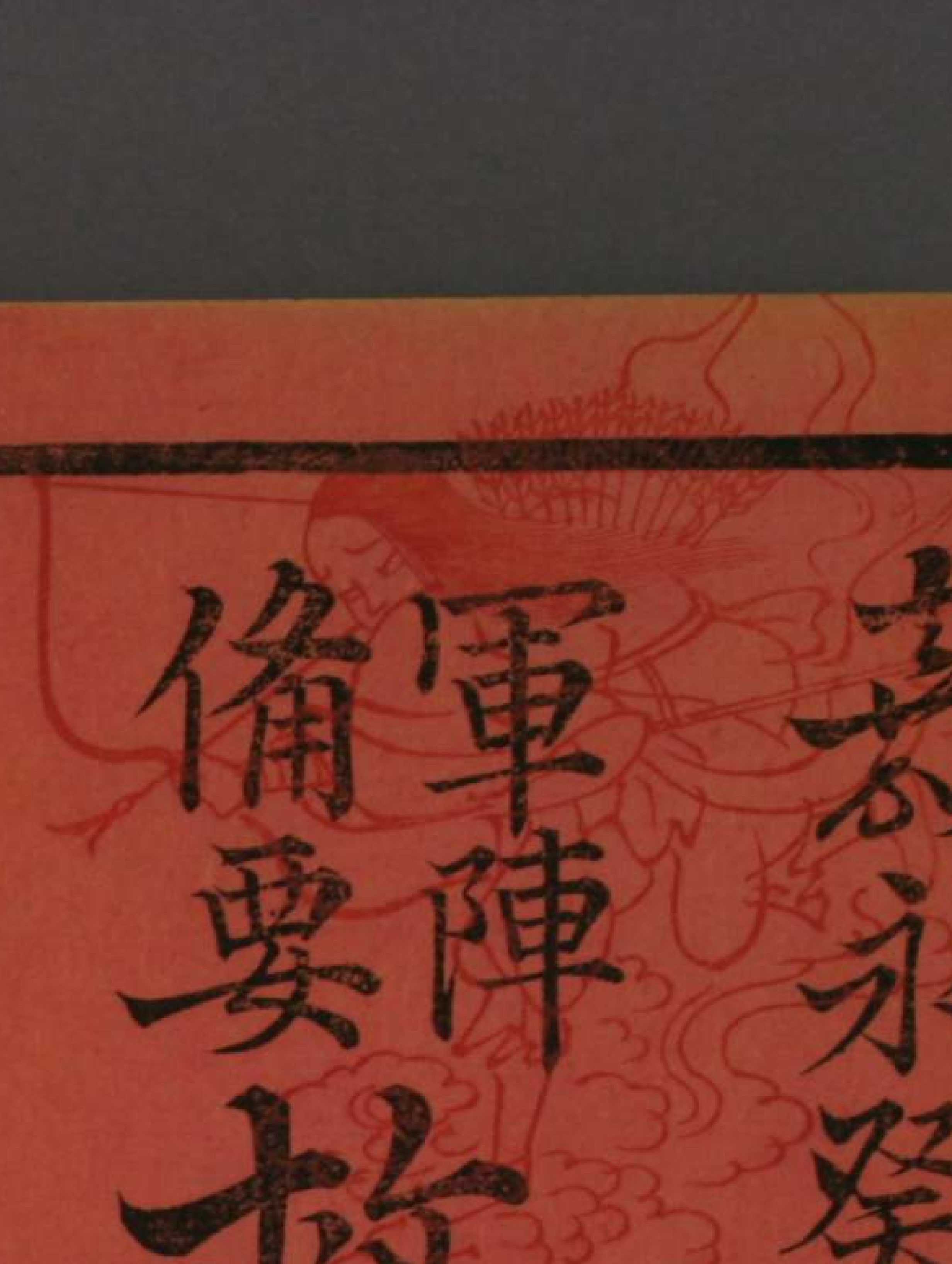
軍陳備要
救急摘方

全

ヤ武り
84



嘉永癸丑冬新鐫

軍陣備要 救急摘方

芫蘭舍藏

自序

天日嗣の御世をしろしめす大皇国はいとおのづから安らけし。人のこゝろもすなほにして。よく敬ひまつらむことをつとめて。ゆめおのづからかはらさことぞ。あらぬ

武 ヤ 84 門 部 巻

帝國圖書

明治 購求

國のまもりはあしとぞ。ろ
うしく天押日命のこしく
まし。しゆかはみづく屍。山ゆ
かは草むすかはね。大君の
へにこそしなめ。かへりみは
せじ。のことは死ちすとい

すなれ。筑紫のつくしせくるあた
まく。額よる崩きもりしも。
皆はは其いかりしくらのひ
けむしきそ。此國よあまいて
すまれ人の真心をうんをなせ。
もろはたゞまもりに。今年の安

さき御世まうくしるゝ。大いさめく
しかうしても古の手
ふりつけは。絶て似とも見えて
折あるまゝ。こと何いふしとてな
まるせぬ。うみ先そりあるゝれ
わきまへてあやまり。強ては本意ならず
幹のしげる根よ。花実ハおのつから
ゆゑみくあまりし。阿ゐしなき
はるかなるいてぬることゝ。此國より
まうくて風流しからものへ
いちゝやさ。この阿ちまてハ。安紀
新ねつくこと。彼紀實の阿ちて

顕はしひろむる人〻。已に多く
世々の書跡を隠して。醫術の
書には素問を追ひ來ぬるは。鋒
さき方脈をしるし。あれともより初くさ
よしあしわきまへし。や声ある事をむし
ともおもへは。天押日命のしるして。訊

紫の陪人をもしことに。真名を振
越えし舞人のふるきたゝしきむかし。思
姫路にて。海行山ゆき。類よみ
こゝに益荒をのこそ。なかなかこされて　ま
なれしもとく。此事としのはれ
けるを。御法をの恵ある

しらぬみちも知らしめんと書
つまらぬふし。ことは記すとも。思ふ人
〳〵の手鏡ともならんかし。
嘉永甲寅のとし霜月
花栄丸舎のあるじ桂誌ス

目次

一 書を著す主意の事
一 火傷乃手當の事
一 鐵砲の玉をとる事
一 火彈にて火傷をし手當の事
一 毒烟に中りたるを療ずる事
一 金創手あてのこと
一 血留の藥のこと
一 金創乃心得のこと
一 閃挫の手當の事

一 打身にて即死したるを救ふこと

一 骨を折たるときの手當の事

一 暑氣に中りて悶絶せんとせし時の手當の事

一 凍死（コゴエ）たるを救ふ心得の事

一 溺死（オボレ）たるを救ふこゝろえのこと

一 氣を養ふにて臍を壓（オス）力を生ずる事

一 藥方八首

以上

救急摘方

文化甲子の頃（コロ）水戸の原南陽が砦草といふ書を著（アラハ）して梓（アヅサ）に上せしハ醫（イ）門の用意至て深切なることそのなりその開巻に事あるときハ人氣を勢出て盛壮（セイサウ）の氣をやるそのなれバ大事ハ時に臨（ノゾミ）てハ其身を愼（ツヽシ）むことを第一の忠とすへしといへる最（モットモ）至當の説（セツ）なりけるげにやたの身を愼むも忠義と思ふ故なれバ其勢の出ることもある時の宜きにこそあれひとく人に勝（スグレ）たる大功を立べきことのなれバなりされバ孫子にもそのことを論じて勇と怯（ツタナキ）とハ勢なり強（ツヨキ）と弱（ヨワキ）とハ形也といひしく

軍ハたゞ其時の機會次第にて強くも弱くもなることを論じたるなり故如何となれバ凡兵士の氣の伸る時にハ弱きものも化して強くなり屈するときにハ強きものも變じて弱くなる是れ氣の伸て進むものを勢といひ張て敵を壓すものを形といふ故に軍術の要とするところハ唯此の機會を失ハずしてよく此形勢を得んこと最第一のことなるなりされバ兵ハもと凶器なれバ止ことを得ずしてこれを用るのゆゑに再び軍術の本意を論じていたく義を争ふて利を争ハざるハ以て其義を明にせむとなり故に人を殺て人を安むれバ是を殺て可なり戦を以て戦を止れバ戦て可也とぞ示をしたり此義を守るを義兵といひその利を貪を貪兵といふ今義兵を以て貪兵を破んことハたとへバ石を卵に擲が如くなるべし我邦ハ太古より國土自然の天質にて義勇の心の萬國に冠たることハ異域にも之を称して怖るところなれども久しき泰平の徳澤に驕過する游惰より其義勇の心を忘失ひするが如くなりしも激せられてハ必發せざることなけれバこの孫子がいはゆる勝者の戦ハ積る水を深谷へ決注ぐがごとき軍の形も圓き石

を高き山より轉墮がごとき戦の勢も。おのづから勃起して。大熕火攻をものゝかずともせず。勇威を振ひて伸進すれバその多かるべきハこれ必然なることなるべし。さらバかれ速男の若武者などの。鳥銃火攻に損害を蒙。奮撃突戦に創傷を受打撲閃挫をいふまでもの。なきのあらんときに將士隊長などすべくも。これを治むる術を知得て。速に患厄を救得させむことならん人を愛する志の一助ならめとこれもひとつしよりにそうに原子が作意にならひて。さしあたる危急を療ぞべき方法を。素人までもたゞちに會得せらるべきやう

に書記し。藥物の節約にして製し易きものを撰出して一小冊となしぬるも。ひとへに草野の微忠にしていはゆる旱の雨具なるべし。

火傷の事

火術にハ。榴炮。火瓶。雷砲。雷筒。火櫃。火船。飛彪鉋などの敵を刧す。そのあまといふ所なり。至て輕き火傷なくハ皮膚も糜爛するにいたらぬ。そのハ速にその傷處に水を多く灑かくれバ。痛忽寛鬆。そのなれども。屢重きものなれバ。その傷處も。手足ならバ速に燈油の中へひたらく差こみおくべし。惣身ならバ酒樽の酒

を半分に分て樽の中へ身を没入て良久く漬居べし。さまで酒は噤べからずもし麋爛甚くして痛堪がたきときは鶏蛋油を多く塗りて裂木綿にて縛おくべし。（薬方おほけれバこゝにハおくに記す）褁帘の我邦の太古細螺のキサゴといふものを打砕てその生汁をとり蛤の生汁に合せて火傷に塗て治せる神方あり。今も海邉の土人は蛤の生汁のよく火傷を治せることをいへり。一説に古事記のキサ貝は蚶の赤貝と呼ものなりといへり。本文にキサ貝を岐佐宜とあるはもとつぶすことのやうなれど。集の字を焦の誤とすれバ赤貝を焼て粉にしたるといふもまたその理なきにあらず。この物もまた火傷に効あるべき品なればなり。いづれにもあれ本文に人乳を加ふることをいへるは最効あるところなれば人乳を得らるべくは蛤の生汁にこれを和して塗こと最よし。一説に（合せてどろどろになりたると人乳にとくたるなりともいへど。人乳にもこの効あれバ暫くこゝには記しおくなり。）予嘗て馬の火傷ありて毛ことごとくぬけ膚爛て悩めるに蛤の生汁に蒲黄の末を和して塗たりしに速に効を得さることもありき。（これも古事記より思ひ得たる治法なり。）それは人の病を治する薬は馬にもまた用ふべきことなればなり。海近きあたりにてさしあたる薬なきときにはこれらの

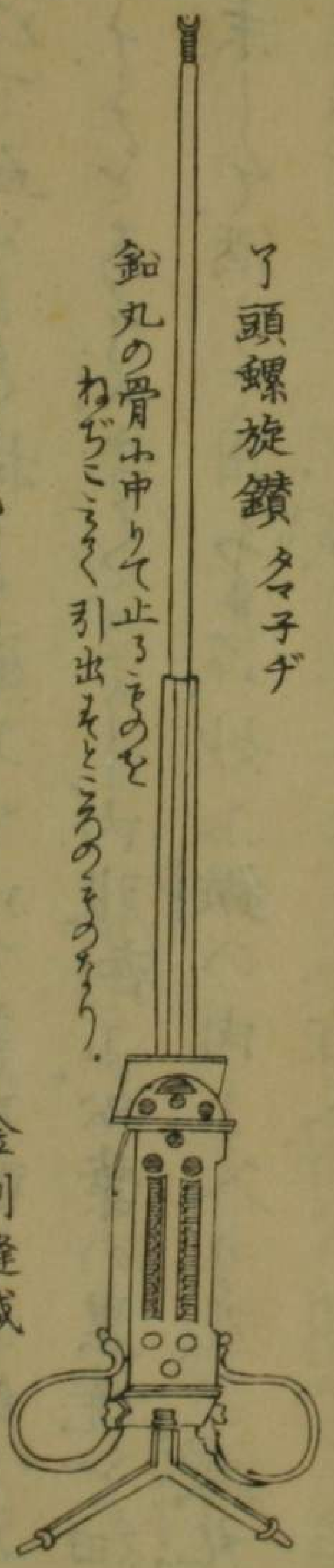
事も心得くよきことなれバ此に記しおきぬるなり。

鐵砲の玉をぬく事

或人の說に鳥銃ハ中り遠く存外に死傷少きことの也。大砲ハなかにはちらの多となり。遠町ハ象限規四十五度を高仰の限とせて町ごとに段々の高仰あれども中りハ甚遠し。（案ずるに鳥炮ハ西蕃に始まるといへども烽火の製ハ周漢のむかしよりありて司馬相如が傳に烽擧燧燔といへど漢書の注によれバ薪を用ひたるものと見ゆ然るに續日本紀元明天皇和銅五年の紀に河内國高安の烽を廢て始て高見の烽および大和國春日の烽を置くを以て平城に通ずとみえ萬葉集六の巻の長歌に射駒山飛火が嵬に萩が枝をとゝとゝ古今集に春日野の飛火の野守いでゝ見よなどよめるものハ決して薪にハあらで火薬を用ひさるものと明なり詳なることとハ別に記しおけるところなし今我邦にて製する硝石を以て装する火藥の亞度ハ西蕃にいふところに超るをもてバ我邦に生ずる此物の性ハ遥に異邦に優まされるを知るべしその事ハ予が續て刊行する硝石製煉法にこれを論ずるものなり讀て心得べし）

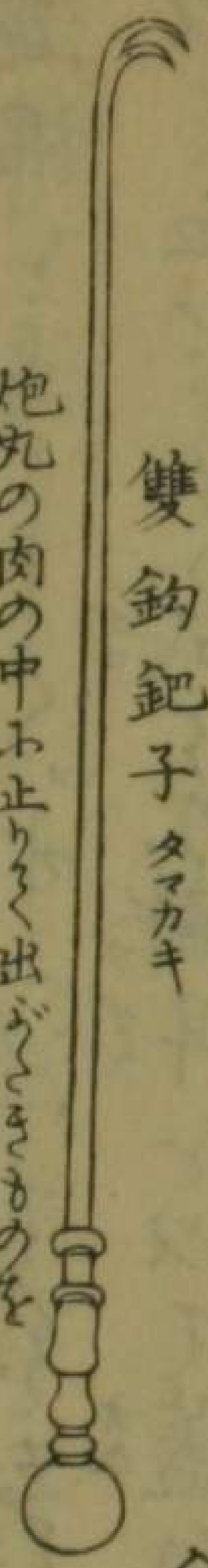
我邦にて永禄天正の頃、鳥銃せり合の中へ騎馬の勇士の馬を乗入て敵を追崩しけるに常にして珍しからず指矢の中へハ却て入るとも鳥銃の中へそ思ひの外に入まじきものなりといひならはされどいかなる鍛よき鎧兜なりとも近く鳥銃の力強き丸を受て徹らぬ名器ハあるべしともおもはれねバたゞ誠忠より張出して此身を衛護自然の盾こそあらまほしけれ。されど戎狄の剣首銃ハ彼が性怯且刀鎗の鋭利なるもののあらざるよりかゝる兵器をまでも造出せしなれバ便利なるやうにみえて實ハいたつて拙き兵器なり。

故ニ我邦人の深入接戦ニハ古の劔首銃ハ忽切て両断となすべきものなるべし。然らバかの深入接戦ニハ兜鎧より必用の具なることハいふまでもあらねど。此氣の張出しするものニハまた他を壓倒し不可思議の力を生ずるを以て矢鉋とも避てかれが爲ニ身を害ことなきものなり。（此事ハ後ニいふべし。この力あるを觀得したるより予ハ私ニ之を衛氣と名づけたり）さるをもしこの氣の虛隙ありて敵の彈丸を受ることもあらバ頭面胸腹の急處ハいふまでもあらねど。鳥銃の力弱くして肘臂股脛などの骨ニて丸の止りたるを。後ニ圖を出したる。了頭螺旋鑽。雙鉤鈀子。鷙嘴



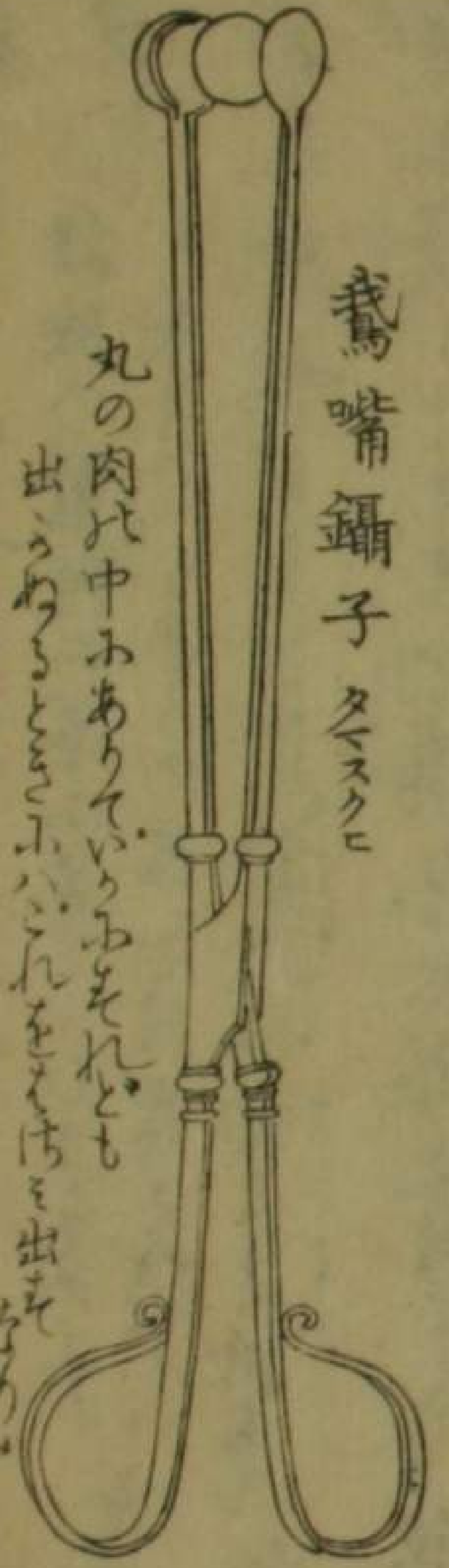
了頭螺旋鑽　タマ子ヂ

鉛丸の骨ニ中りて止るものをねぢこみて引出すところのものなり。



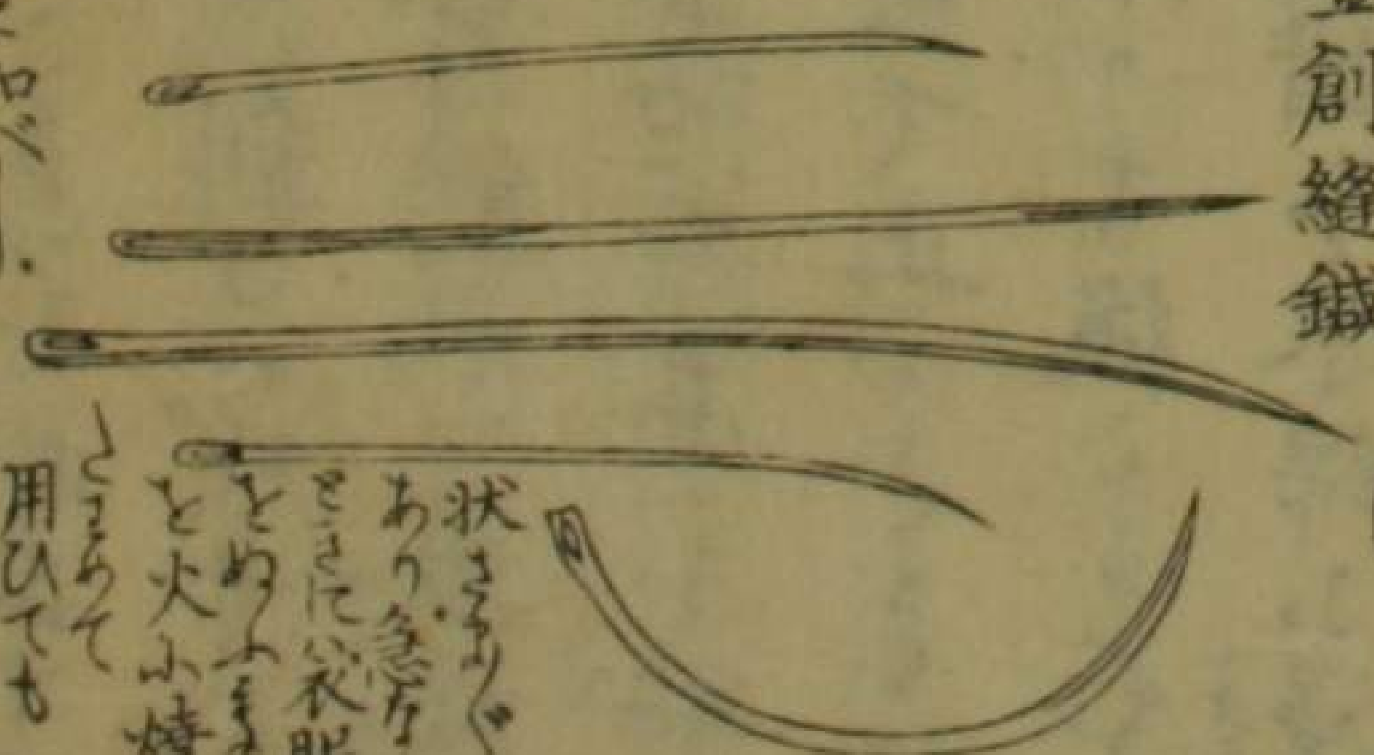
雙鉤鈀子　タマカキ

炮丸の肉の中ニ止りて出がたきものをかき出すところの鈀子なり。



鷙嘴鑷子　タマスクヒ

丸の肉の中ニありていかニすれども出かぬるときニハこれをはさみ出すなり。



金創縫鍼

状さまざまあり急なるときに衣服をぬふものを火ニ焼まげて用ひてもよし。

この三種ハ紙上狹隘ゆゑニ圖をちぢむるところ其真ニあらぬなどと知べし。

鑚子などの具を豫て用意しおき速にこれを挑出すべし。（諸候の醫師の軍に從はしむるものハ必命してこれらの器を用意さすべし）その創口ハ灰汁またハ清水にてよく洗ひ。（醋にてよく洗ふもよろし）愈創水を撒綿絲に浸しこれを塡め。魚膠膏あるいハ密陀僧膏を貼て後に木綿にてまくべし。もし血出て止がたきハ。海綿を湯もしくハ水に浸したるをしぼりて後これを以て血とよく拭とり。槲耳を以て蓋ひ。醋を木綿に浸したるをあてゝおくがよし。内服劑に松葉の黒焼を細末して酒にて用ふれバ妙に。鏃の肉に入り及ひ鐵丸の出がたきさへその鍼のおちたるも。竹木刺の類をも治するもの也。（これ一家の秘方也）これハあまりに平穏なる品ゆゑに利なしとおもふべけれども不思議の効あることなり。（その他。衛茅の實鳳僊花の實なども効ありといへどいまだ試ざれども酒にて用ふるなり）

火彈にて火傷せし手當の事

火彈にて火傷を冒り。火藥鐵丸などの粉屑あらバ。鍼又ハ竹箆にてよく挑出し。水疱ハ鍼にて水をとりて後に海綿にて（湯にひたししぼりて用ゆ）血を拭ひとるべし。（血出て止ざれバ前のごとくに洗ふべし）後に鷄蛋油を木綿に浸てこれを蓋ひ。その上をまた木綿にてまくべし。頭面の火傷。及金創にもそれぞれに繃縛の簡便なるを圖に出しおけバ預て心得おくべし。

毒煙にあたりたるを療ずる事

毒煙に中りたるハ。そし神識昏冒。身體麻痺したるときハ先紙條にて鼻孔をふかくさして嚔せしむべし。（これ煙ハ必先鼻より入て頭腦を犯すを以て也。故に初より鼻に綿絮あるいハ紙をもみて鼻穴を塞ぐときハ毒に中ることを免るべし。）嚔藥にハ胡椒を細末して蓄おくべし。相州箱根山に土人の嚔草と呼ものを生ず。これ一種の舌交藥なり。試に此物を内服させバ或ハ吐を催しまたハ身體麻木を發す。いづれの病に用ひて效あるべきことゝおもはれど、いまだ詳ならず。嚔をとるにハ他に勝れたる能ある物なり。嚔をとらせしむる後。嚴醋を口鼻へ濯ぎまたハ内服さすべし。人乳汁尤效あり。胡麻油を多く嚥しむるもよし。桃仁よく毒烟を解するよしといふも。油に毒を包攝するの效あるがゆゑなり。故に杏仁を代用してもその效ほゞ同し。桃仁杏人を用るにハ泥といふまで研末して服しむるなり。醫方に（杏仁を用ひて喘咳を治し。桃仁を用ひて蓄血を治するも。其原意ハ類似するところあり。）又明礬の細末もまたこれを解することをもいへり。人糞及人尿もまたよく毒烟を解するものなり。毒烟にあたるに青[illegible]銖砒霜礬石の類を用るといへるがその製法種々あれども。火瓶中のハ硫黄馬蹄刮屑樟腦などを用るといへバ。臭瓶にハ安善娜

その臭(クサ)さあるハ悪厭(ニクミイトフ)べきハそのむぐらさして怖(オソル)るにいたらぬことゝなりいづれにも毒烟とみるならバ速に地に伏て土沙と口に含(フク)ミ地氣を吸ふべく毒氣を避(サク)べしすべて煙ハ昇(ノボ)るものなれバなるべく地に伏て口鼻に觸(フレ)ぬやうにすることこれを避(サク)るにもつともよしとそまでぞなる。

昔武田信玄が敵に射るところの鏃(ヤジリ)を體(ミ)の中に残り止るやうにしたるを自須(ジマシ)をしけるを。東照神君きこしめしてそれハ武道の本意にあらずぞ。不仁の甚しきものなり彼(カレ)ハその主人の為に我に敵するものならハこゝまでその主人にハ忠臣なりされハてこゝまでを防(フセガ)ん為に射(イ)て突(ツキ)をなせるハこれ止ことを得ざるがゆゑなり然るを鏃の肉中に残りて後まで惱(ナヤミ)をのこすがごとくにせむことあまりに残忍(ムギドウ)なることぞと仰られしとなり。然るを禽獸に均(ヒトシ)き戎狄がこの毒烟を製して不辜(ツミナキモノ)の衆人を惱(ナヤマ)すこそこれ天の憎(ニク)ミするところなるべし。彼がこれを用るも毒に中りたるときの用意ハ知ざらんバあるべからず我邦人の好んで摸(ナラフ)べきことにハあらじ。すべて戎狄の乖巧(クワイコウ)(ワルダクミ)悍(カン)悪なる性怯(ツタナク)して死を畏(オソレ)るより。百慮(リヨ)千思(サマ〴〵ニクフウ)してかくのごとき火攻の具をもかくも製したるものなり。我邦人の苦戰毒逐迅速(スミヤカ)に敵に迫(セマ)り。

こゝろを殺して而後に止む。天禀の勇威を餘所（ヨソ）にして。これらの事を學び。劔首銃（ケンツキテツパウ）革（カハ）具足をよろこぶなるハ。全く一時の迷惑（マヨヒ）なり。よく思慮（シリヨ）をなすべきことなり。

金創の心得の事

金創（キリキズ）ハすべて速に清水にて洗ふべし。灰汁もよし。石灰を水にかきたてたるを絹にて濾（コシ）するも用ふべし。さる外科にこれを金創の水藥とよびて。秘傳としきたりしが。その後西戎の發明によりて水を用ることゝなりしなり。往古ハ焼酎とのミ用ひたれども。焼酎ハ痛強くして堪がたければ代るに石灰汁を以てし。遂にハ水を用ることゝなりしなれど。焼酎を用ひんよりハ。生醋を用ひてるもよければ。小さき疵ならバ用ひてよし。金創ハすべて部位と淺深によりて治不治を決（サダム）るものとながら。いづれにもはやく血の多く出ぬやうにするが肝要なり。もし血の迸出（ホトバシリ）て止ざるハ動脈を斷（タチ）切たるなれバ。よく洗ひて後。血の迸（ホトバシ）る血管（ケツカン）を尋ね（タヅネ）その廻の肉を切て血管を曳出し。（曳出すにハ鑷子（ヒキ）を用ふ。）糸にて紮（クリ）おくべし。血管多くして紮がたきハ。烙鏝子（ヤキゴテ）にて焼て管端を塞（フサグ）べし。故に金創を治するにハ必此等の器なども用意すべきことなれども。それハ醫師の職（シヨク）にて煩（ワヅラハ）しければ。

あり合鐵器を火に焼赤くして當ることく心得てよし。なき金創を縫ことハさしてむづかしきものにあらず。世に名ある外科までもこれを行ふハ希なることゆゑさして巧者に熟練したる者とてもなくそれ巧拙ハすぐ心の平不平によるものとなれり。ゆゑに武士を嗜ふかき人ハ金創鍼を七八本ハ鎧櫃に入おかさするがよし。糸ハ麻よりハ木綿絲を用るがよし。これを縫にもあとさきま中と次第して縫をよしとして片方より縫ときにハ末ふまりて一面の皮になるこそ出来て愈て後看好からねバなり。裁縫匠のくけ縫をする意になりて心静に縫ときにハ何の子細もなきことにて。決して傳授秘訣のあるにハあらず。よく縫たるあとへ油を少し引き。（緩和膏の片脳うすきを用ひてよし）魚膠膏またハ鋄をとるべく。（鋄とるにハ鷄子白を木綿に浸してするなり鷄子白をとるにハ上下の尖へ小孔を穿ち一方より吹ときにハ白先出るをとり分て用ゆべし。）その上へ醋木綿を蓋ひ。（醋木綿とハ布を畳て醋に浸したるなり。）褁帘をなし。夏月ハ膿易きものなれバ。もし痛あらバ解て更べし。よく手當をなせバ不日に愈べし。そのゆるまでの間ハ食物の禁忌を嚴しく。粥を食せ。壯實なる者にハ輕き下劑を與へべく。大小便の滯なきやうにするがよし。戎狄の鈍刀にて抓破られたるごとき創傷を蒙しも

そのハ水にて洗ひて後に密陀膏を貼(ツケ)おくべし。魚膠膏にてもよし。創處大なるハ鋋をあて、醋木綿を蓋ひ。裹帘(マキモメン)をなすべし。血出ることも多きにハ槲耳(ハツダケ)をあて木綿にてまくもよし。手の動脈ハ肘(カヒナ)より指頭へ流れ。足の動脈ハ股に下りて趺(アシ)に及ぶ。すべて金創の血出て止らざるハその動脈の流れ来るところを布にて紮(クリ)て治を施すなり。この事を忘るべからず。

血留の藥の事

尋常(ヒトヽホリ)の血留にハ生石灰を細末して鷄子白(タマゴノシロミ)にて煉(ネリ)たるを日に乾(ホ)し再(ビ)極細末にして篩(フルヒ)たるを用ふべし。よく血を止ることそのなれども。灰末創(キズ)口に入るときハ。膿(ウミ)を釀(カモス)ことしばしばあれバ。これを用るにハ。灰末の創口に挾(ハサマ)らぬやうにすべし。爐灰もまたよく血を止るものなればもし用んとならバ。よく細末し篩(フルヒ)て後に用ふべし。馬勃(バボツ)俗にほこりだけといふ物も。よく血を止るによろしき品なり。竹藪(ヤブ)の中などに生ずる。そのほか藥舗(キグスリ)にあり。これらをも貯(タクハヘ)おきて用ふべし。またしながら槲耳(ハツダケ)の血を止る効にハ及びがたし。槲耳(ハツダケ)ハ槲(ハソ)の樹(キ)に生ずる蕈耳(ヌケビラ)なり。その質柔(ウマレヤハラカ)にして革(モミカハ)の如し。外に被(カブリ)たる硬(カタキ)皮を去て槌(ツチ)にてよく打て軟(ヤハラカ)にして貯(タクハヘ)おき。創(キズ)の大

小に應じて截て用ふ。これを採にハ夏月をよしとす。楡の木に生ずるを楡肉とも楡耳ともいふ。支那人ハこれを食ふといへり。これもまた代用すべし。海綿を火に熔して蠟に投じ絞て創口を覆よく血を止るなり。これもまた心得おくべし。

金創の心得の事

自然に受得たる人身の機關ハ奇妙不思議なるものにて。一切の病ハもと人の身體に固より無きものなれバ。邪にあたり毒にあたり込まれてを排ひ除んがために起るものにて。これ、そのものをさして病證といひける證に應じその力を扶て藥石を用ゐる我醫術の本旨とす。これ自然受用の病を治する機關なり。今金及創傷ハいかほども速にその皮肉を故のごとく合せて血を多く出さねバ一時を過ぬまに。その損傷たるところハおのれと接續て氣血を循環し切断たる血管筋膜も。おのづから相合て自然に舊に復すべき分なれども。疵大にして合がたきより止ことを得ずして術をも施すれバその理をよく會得して血を多く出さぬやうにはやくすれバ大槩の疵ハ縫ずにおよばず。繃帯のみにてよく治すべくなれバ。武士もよくこの事を心得て。互にその疵を救ふべきことなりとハこれ忠臣の用心なる

るべし（伊勢平蔵が説に生柿熟柿白柿ともに産婦手負等に堅く禁ずるハ血をくろうして物なれバなりこの事を知ざる人ハ鎧の小手草摺臑當などの裏に柿澁を以て涂する布を用ふるハ軍事に疎きゆゑなり金創ある人柿渋布を身に近づくれバ血を吸出して血止ことなしされバ武具にハ固く柿渋をいむべしまた柿澁を以て製しある器ハ蟲を生じくよろしからずとその著ところの舳艫訓といふ書に記しあり予ハいまだ試ることならねど因に此にこれを載て人々に示すのみなり）

閃挫の手當の事

閃挫また骨節の脱臼するを早速療治をすれバ薬抔貼るにも熨にもおよばず速に舊に復して運轉自在になるものなれバ此事ハ尤心得おくべきことなり骨節を舊に復する理を辨知ときにハこれ抔脱こともまた知らるゝがゆゑに手にあまる敵を擒にせむにハ心得おきて大小益なきことなり骨節が脱臼したりとて狼狽まはるうちにやゝもすれバ部が腫あがりてくるゆゑにこれをとのくるにも餘計の苦痛をなすなれバ骨節ハいかなる状にて接屬するといふことを知ときにハ旁にある人より敎てさへも即坐に成得べきことなりすべて骨節の機關ハ悉皆臼を以て接屬するものにて大小形狀に違ハあれど機關の趣ハ同一樣なるものにて閃挫ハこれが脱出て臼の外へ出するを筋ハおのれとそのまゝに引よせて緩ぬゆゑに外へ高く出るなれバ骨關ハ齟齬てあるなり故にこれを順にしなく力を入て曳延して齟齬

する處を脱るときにハ延する筋がおのづと曳つけて、もとの臼へ容て舊に復するなり。決してむつかしきことにハあらず。この事をよく會得すれバ接を脱しも自在になるものにて、たなにの勞も術もいらざるものなれバ、あまりに為易きことゆゑ正骨科にハこれを秘事にして妄に人に傳へぬやうにするハ外に伎倆なきがゆゑなり。然るを素人ハ骨を接ことゝいへバ必むつかしきことより懸て接そのとおもへど、その實ハ人為の曳弛と自然の牽縮との二ツの外に術も法もなけれバ、二三次も行ふてみれバ確に自得せらるゝものなり。故に正骨科も接するかゝに直よ

愈てハ世渡りにならぬゆゑ、私に酒と糊とにて藥末を和して皮上に貼ときにハその二品にて膚理の氣を閉て腫の散こと遲く、愈るまでにハよほどの日數を歷るやうにして利を貪る。至て拙陋な所爲のものなり。すべて酒ハ血を凝結し、醋ハ血を融釋するものなれバ、世の正骨科の用る酒と糊とを以て和する貼藥などハ、酒糟にて煉する鉄烙劑などハ皆相表裏する所措なり。故に打撲閃挫の腫あるものハ醋に片腦少許を投（大槩二三匁許を用）火に温め布に蘸して熨するがよし。いかなる腫にても二三日を過れバ散て舊の如くになるなり。よくこの趣を會得

もちべし

打撲にて即死したるを救ふ事

頭額胸肋脊推腰髎などを打さるハ。部位によりて即死することあれども。必試に肩井の活法。脊椎の活法。臍下の活法をつよく行ふてみるべし。（さしあたり柔術家の中に。死活券法を傳るものにさす）るなり。また甦生することのあまたバなり。ろぬうちにも肩井の活ハ。頭腦へ近く徹るゆゑに。効速なり。息出ずとて。そのまゝに棄おくべからず。いづれも平常心がけて。死活の術を傳る券法家に學びて心得おくべきことぞ。武士たるハいふまでもあらず。人の臣たる醫師ハなほさらなれども。心得るべし。不虞の用に供んとおもふなりぞ。その職に合ふものとぞいふべけれ。（この券法のあらましハ後にいふべし。）

骨を折たる手當の事

折易きハ。肘臂股脛の骨なり。ころびて痛むところを引立させくるところにハ。必撓て幽に音あるものゆゑ。折たる處ハ慥に知らるゝなり。さてその處に腫あらバ。熱き醋にてよく熨てのち（醋に片腦を多く入るゝもよし）。密陀膏を布にのべたるにて纏て。醋木綿にてその上を包み。圖に出したる竹簾（木の薄板の巾狭きものにて代用るべし）。を當て。その上より裂たる木綿にて堅く縛るべし。これぞ速に療治なれバ。二三日を過ぬうちに

おのれと接續て素に復すること駿くべきなどのことの也。さまでにちからと愈合のうちハ皮肉より遅きものなれバ。半月乃至一ヶ月などハ折たる方の手足を使ハぬやうに意を用ふべし。且両三日間ハよく煖ておき木綿をも仕なれまじし。さまで股脛の骨を折たるハ小便をもふびく通ずることのゆゑ。士卒などの輩ハ便當器といふて桐油にて造へたる器ありけれバ瓢箪の底を切りたるを逆に繋つけおきたるをさしおけバ自身にて小便ハさせてなり。それらぞあるにあらずバ竹筒の節をとりたるを以て陣屋の外へ小便の出るやうにしたるなどあてがひおくべし。また簾の代に黄蘗の皮を熱湯に漬おきたるを用ゐてぞ。大きさものゝほどに厚き皮ならざれバ二枚なども重ねて用ふるがよし。

暑にあたりて悶絶せんとせしの手當の事

暑に中りて悶絶せむとする者ハ。はやく山陰あるか又樹の下か風の通りよく冷き處へ負ゆきて。先ッ生姜の絞汁を多く嚥すべし。水なども多く飲しむべからず。もし暑氣に中るといふハ壯實なりし血液の粘稠なる人か。又ハ虚弱なるもの。いづれにもあれ平常不養生なる病ある人に多きものなれバ。まづ暑熱に堪がたく。

上衝し。腹氣が心下へ迫りて。昏眩なるときあらば腹氣
が下降ときにハ速に治するなり。かゝる患なく。よく
寒暑に堪らるゝ身となさんにハ。平常に酒色に耽るこ
となく。食事を節して。日々灌水し。息を調ること
を心がけるべきなり。人の臣たるものハ。その身體ハ固より
それ主人より預りたるものなるを。我物と思ふ
く心のまゝに身を持されバ。大なる不忠の人なるべし。
よく己に顧て慎を加ふべきことなり。
暑熱に中りて。昏眩悶亂なる者に。熱土。焼瓦を臍に
あてゝ。熨ところの法もあり。熱湯を布に蘸て臍中
少腹を温るなどもよし。臍中及臍の両傍の天樞に灸
するもよし。内服剤にハ。硫黄。消石等を良とされ
バ。鐵砲の玉薬を水か湯にときて服するがよし。拊
水術とて。冷水を頭に拊つけるやうに多く灌するな
ど尤効あるを。世間に中暑の薬とて。香薷散。五苓散な
どの類を用るハ。後世醫學の本旨を失ひたるよりかゝ
る薬を以て暑邪を治せんことゝおもひ過りたるにて。こ
れらの薬ハなべて陣中へ持ゆくハ無益の事なり。さう
く陣中などの用意ハ。單方にて簡便なる剤をよし
とす。次に載する建中散ハ一方にして感冒。中暑。食

傷、霍亂、痢病、および胸腹痛、疝氣、積聚なとに用ふべき。そのあまりバこれを用意しておくがよし。

凍死したるを救ふ心得の事

凍死したるものハ、その身體に新汲水を夥く灌かけて、關節を運轉し、惣身を按摩して後雪の中へ埋め、たゞ頭面ばかりを見はし、口を開きて息をよく吹入る時にハ、蘇生するそのあまたこの息を吹入るにハ、壯實の者をしてかはるがはる吹入さすべし。かくして息出さらバ直に雪の中よりとり出し、醋を多く温めて、頭面と惣身へかけてさらに吹かけて、再身體を摩擦し、後衣被を厚くし、枕を高くして右を下にして横に臥さすべし。敷ものにハよく打たる藁薦を重ね、その上へ臥しめ、風の透らぬやうにしておくがよし。凍死の一日夜を歴たるものが蘇生したるためしもあれバ、死たりとのこいふて、うち棄おくべからず。まづ地を深く堀て、その中へ入おきて活るよしもあり。いづれにも心を盡し愛憐の情をいたすが人を使ふものゝ用心なれバ、この事をよくおしふべし。（この愛憐の情ハ外寇防禦の最上第一なることしらしむべく大熕兵刃にも優まる必勝のそのなることゝをよくおしふべし。）

溺死したるを救ふ心得の事

水に溺《オボレ》て死するものハ、はやくぬれ衣帯を解《ト》き、躶體《アカハダカ》にして、両脚をとり、逆《サカサマ》に引起して、両脚《アシ》を吾肩《ワガカタ》にうけ、溺するものゝ腹を脊《セカ》に當《アテ》て、身を前へ踞《カヾ》め、その腹を吾脊《セナカ》にて按《オス》やうにし、歩行《アユミ》ながら水を吐出さすべし。水を吐盡したる後に、脊よりおろし、新淨衣《キレイナルキルモノ》を襲《キ》せ、帯をゆるく締《シメ》て、蒲團《フトン》の中へ臥させ、先口中を開きて、土砂などの内にあるをよく洗ひとりて、鼻の中をも、しごきたる紙を以て、奥までをもよく掃除《サウジ》しさて、口を再開きて、鼻に嚔《クサメ》藥を多く吹入るべし。（嚔薬ハ胡椒の粉又ハ菖根の嚔草、あるひハ皂莢、細辛などの細末を用ふ。豫《カネテ》用意あるべし。）それより肩の真中の肩井といふところを、大指と次中の三指にてつよく摑《ツカミ》て、筋をぐりぐりと按轉《ヒネリカヘス》べし。（拳法に肩の活といふハこれなり。）さて脊推《セスヂ》の両旁《ワキ》腰髖《コシボネ》両脚までをも盡《コトゴト》く運轉《クルクマハ》し、揉《モミ》やはらげて、心下より両脇腹中までをもよく按摩し、再ひ肩井をつよく撚《ヒネ》り、脊《セ》の五七椎《ズイ》の邉《アタリ》を拳《コブシ》にてしたゝかに打《ウチ》、（脊の活といふハこれなり。）またもや鼻中を紙にて掃除《サウジ》し、嚔藥を多く吹入て試むべし。もし嚔出るときハ、忽《タチマチ》蘇生をえまバなり。もしかくまでにしても息出ざることあるものハ、その地を、溺さる者の體を容《イレ》らるゝほどに堀、底《ソコ》の土を柔《ヤハラカ》にうち起し、堀出したる土砂を穴の四方へ築《ツキ》立《タテ》、穴の中に薪を

つゝ火を燒て地下ちかく火氣の徹るほどにして後に火をよく消穴の中をとくとならし築立る土砂をも柔かにして溺者をその穴へ容れ頭面ばかりを出し四方より築立て熱くなりたる土をうづみ入てしばらくおくほどありて嚏藥を鼻中に入又ハ口中へ醋を吹入なとして試むべし支那の昔魏の將に呉起といへる人が士卒の下なる者と衣食を同うし士卒の疽を病しものゝ膿を吮しかバ（上古に瘡瘍の膿を吮ところの治法あり）しゆゑなりその母其父も往歳疽を病しを呉起が吮て治をし恩に感じて軍に死ければ子も亦其爲に死んとて大に哭泣しとなり是切要なる心得にてとかく權威のみにてハ心ある人ハ服さぬものなり肥後守清正の息加藤忠廣が己ハ力あれバとてたまふあり重き鎧二領重襲て軍に出なバ怖ることハあらじといひしと飯田覺兵衛が聽て先殿にハ鎧一領にて數十度の戰につひに手負をうけたまひしことなし死生存亡ハ皆天命にて人力の及ぬことなり國中の民を撫育し諸士をよく懷るときハ三軍の物の具ハ皆大將の身に襲着すると同しことにて誰か鋒先を爭ハむ臣も力を好まとするふと然べしとは存ぜねといひて先殿に

ハいつそかくまでに劣るものとて、大に嘆しけるを、實に士卒までも中心より誠に服するにあらねバ、真の勇氣ハ出ぬものなれバ、諸士をよく懐る仁愛こそ大切の心がけなるべし、又仁者ハ必勇ありといふ古人の誡と思ひ、敢死乃操を過らざるならバ、外寇も豈畏るに足ことのならんや。

氣を養ふて歒と壓力を生ずる事

大氣ハ天地の間に充塞すること、そのごとく、昔にぞ地ハ大氣の之を挙るなりといひて、凡天地の日月星辰、人畜草木、一切の物ハ、すでこの大氣の中に湊く、一ツの塊となしたるが如きそのなり、然しくこの氣ハ、その間を往来運轉して止ことなく、時としてハ盈虧屈伸ありて、その盈虧屈伸の間におのづから數理を具へたる、そのなるが故に、その天地と同一體なる人身なるも、また同く盈虧屈伸ありて、天下にあるとあらゆる物ことごとく此數理を具へたり。（此事ハ予が養生要畧、養氣説等に詳記しおきたり。）其の氣の此身より張出して身を衛護するを衛氣といふ。（天下國家にハ、天下國家の衛氣あることも同書に論じたり。）其の衛氣ハ、張ときハ人を制し、縮ときハ人に制をとらるゝ。此大に張出しする時にあたりてハ、刀劒もこれを斬ことを能ハず、矢鉋も之を害する

ことを得ず。鐵釬石城に邈に優る不思議の力用あるものあり。昔胡元の忽必烈が十萬の兵をさしこして。筑紫に仇をなし時。河野通有は小船たゞ二艘を以てその中へ艚入り。帆柱を倒て梯子となして。胡元の船へ乗移り。敵の大将を擒にせしも。壹岐對馬等を攻取られ味方敗北をせしを憤りこの大氣を張出したるよりぞ。纔の小勢を以て大功を立したり。朝鮮の役に加藤清正は蔚山より二百五十餘町を隔て西生海に在城せしが蔚山の落城近きにありときゝてひとしく。七端帆の小船に從卒わづかに七十人を乗せて明兵四十萬騎の陣どりたる間近く押行しに。敵よりは射出す矢鉋を。雨霰のごとくなるを事ともせず。易々と蔚山城へ乗入しは。これ清正が義勇の大氣が干城となりて四方を衛護するよりぞ。大敵も之を害することを能はず。矢鉋も中ることなかりしなり。またこゝ藤堂和泉守高虎は。三艘の船を以て朝鮮の大船數百艘の中へ乗入て。敵の船十餘艘を乗取りしは。清正。行長などのごとく大功ありしに勵まされたる憤より。此氣を大に張出して。大勝利を得たるなり。また有馬修理大夫晴信は。波爾杜瓦爾の大鉋三十六挺ぶちの軍艦を。小船

三十七艘ほどより圍みたる時、敵より夥（オビタヾシ）く火鉋を打出せしが、一ツも中ることなく、迫りて小船へ近づき、遂（ツヒ）に鐵鏁鉤繩（クサリカギナハ）を以て船へ乗入り、三百餘人を鏖（ミナゴロシ）にしてありしときに、有馬の手にて死傷纔（ワヅカ）に十六人なりしとぞ聞えし。又台灣（タイワン）の鄭森が麾下（ハタシタ）なる柯全斌（カゼンビン）ハ、小船を以て和蘭の軍艦十五艘を逐（オヒ）退けたる類も、皆この勇猛の大氣を張出して、敵を壓（オス）ところの力を發したるより、大鉋火攻を避（サケ）て身に中ることなかりしバこそあれ、怖（オソレ）ぬ心にありしハ、すでにその時に臨める機會（ハヅミ）を得たる。大將ハ果斷（クワダン）あるによりそのなりゆきを遂て　此氣にハ不思議の力用（ハタラキ）あるがゆゑに、遠しといへども、一氣の感應ありて彼を此より壓（オス）ところの驗（シルシ）あることを、手近く辨へ知んにハ、鳥銃を打に、筒が丸を壓（オシ）て向へ進むやうにすれバ、放ちたる丸の中り必強く、筒が丸と別れて、後（アト）へ引やうにすれバ、貫（ツラヌ）く力弱きがごとき。それより觀得（クワントク）（カンガヘテシル）するときにハ、この益が禹に、至誠（コヽロノマコト）ハ神を感ぜしむといひて、己が徳を修て、有苗（イウベウ）の夷を降參させしも、すでにこの氣ハ感應（カンオウ）の遼（ハルカ）に數千里の外に及ばしむることをなすべし。まして、たとひ創傷をかうむりたりとも、それハ身の衞氣にふさがしめたる

ちにハ死ぬるものにあらず。文化の岩草に血止の藥と
て出せる茯苓。葛粉に辰砂を少し入て。桃花色にし
たるを。舌の上へのせおくといへど。此等の物がいつでも血を
留る効あるべき。それ効あるハ。たゞ目を閉て氣を鎭る
ときハ止るといふ。その氣をとゞむるにのみあることなり。
すべて周身の氣が上弔になりゐるとき出血も止ざるべし
その創をうけても。力抜て働ハ出来ぬものなれバ。さら
に大将士卒までも。その正氣を養ふよりぞ勇威
を出。運命を保そのなることをよくたもつべし。調息の術ハ。事
行よりこゝろを觀得をしめんための法にして。予が
延壽帶の製ある所以もそのなり。室直清が說り。

武士が武藝を修行するハいふまでもなきことなれ
ど。武運なきときハ。武藝を用ずして。犬死とす
ることあるなり。武士ハひたすらに武運の稽古をする
がよし。これ武運の稽古といふぞ。國家祖宗の大恩を
一日片時も忘るゝことなく。身を粉に碎ても厭ぬ
心を養ひうるまでぞ。おのづから天理に合て武運を盛
になることその本意と示をしハ。これ即これ氣を養ふ
ところの根本にして。尤至當の確言なるべきことにて方
今國土の勇威大小興べき氣運變革の時にあたり
てなほ。唯此武運の稽古なり。炮術操練にぞ大に優さ

る切要の事件なるを忘れとおりおりいらざる老の啐囈ながら、聊此にその義を辯ぜしなり。

愈創水

緑礬　　明礬　各百匁

右二味、細末、水五升を入て火に上せよく烊解して、火より下し、陶器なりとも樽に入て陣中へ持ゆくべし。用るに臨て布なりとも撒綿絲に浸て創に貼る也。もし創浅きハその水にて血をよく洗ひ取たるあとへ、手早く此薬を畳布に浸すると貼るべし。まさき木綿をもまとへバ大槩なる損傷ハ速に愈るゆへ次の薬布なども用るにおよバず、故に此薬と前にのべる石灰末、搬耳馬勃等ハ陣中に多く用意するがよし。

鶏蛋油

鶏卵　五十個　胡麻油　二合

右鶏卵の皮を去、擂盆にいれよくまぜり、徐々に麻油を加へつつ相和し用ゆ。（鶏卵ハ白を去て用るをよしとす時に臨て製するハ尤よし。）

密陀僧膏

密陀僧　五十匁　　膽八油　百匁（薬舗に売るところの油といふものこれなり。）

右密陀僧の細末を油にてよく煉合せよく後、水二

合を加へて鼓吹上に上せ手を止めず攪煮（カキマゼ）ること半時ばかり少ばかりを水に滴（タラシ）て丸るゝ程をこゝろみ火より下して蕃瀝青（オランダチャン）の水飛したるもの三十匁を加へてよく攪（カキマゼ）て再び火に上せよく混和（イリマゼ）して粘稠（ネバリ）なるところを下して温なるに乗じて布に攤（ノベ）て後に乾くを待て巻おくべし。

魚膠膏

魚膠（ニベ）　百匁　　密陀僧　三十匁

右先焼酒五合を以て密陀僧の細末を浸おくこと二日ばかりにして滓（カス）を濾（コシ）去りまた魚膠に水一升許を入てよく融解（トカ）し水氣の減ずるに随（シタガヒ）て密陀僧の焼酒を加へて膠飴（ミヅアメ）の如くになりたるとき火よりおろし布もしくは絹（キヌ）にのべて貯（タクハヘ）おくなり。俗に上透膠（スキニカハ）といふものを水にて煮たるを紙にのべて即効紙と称して賣ものはこの畧方にてこれまた用ふべし。

緩和膏

白蠟　六十匁　　胡麻油　二合（夏は一合）を用ふ。

右白蠟を薄（ウス）く斷（ケツリ）て麻油と火に上せて温め油の上面の動くをまちて蠟を入融解（トケ）するとき火

よく〻下し器に入て貯ふるなり。ときに片脳三十匁を加て用ふるもよし。此の膏よく胼胝を治す。故に水戰不龜手の藥にハ専ら此大に製して用ふべし。（蕨藥などの類まで。脚底を傷めたるにハ此油菜を煙管の火皿に一ッほど入て火にとろして滴し入るべし。）

（鶏蛋油をも用ゐるもよろし。）

建中散

乾姜　良姜　桂皮（藥舖に東京厚皮と呼ものゝ麁皮の味淡くして辛味なきところを斷去て内の辛きところのみを用ふ一斤にしてやう〳〵五六十匁ほど得べし。）

丁子　唐縮砂　唐木香

（各等分）　唐呉茱萸（微炒減半。）

右七味細末して、一貼に二匁許より三匁にいたる。熱湯に點服す此の藥、感冒、中暑、霍亂、下利、疝積、一切に用ふべし。

緩下劑

唐大黄（百匁充實にして色黒からざるものをえらぶべし。）

右水三升入て一升に煎じ、滓を濾し去て上好の硝石五十匁、白蜜百匁を加へ、重湯上に煮て飴のごとくならしめ、器に容て貯ふべし。夏月ハ日数ふれバ柔になるなり。蜜に代るに砂糖を以てするも亦可なり。一度に一三匁を用ふ。

肉刺藥

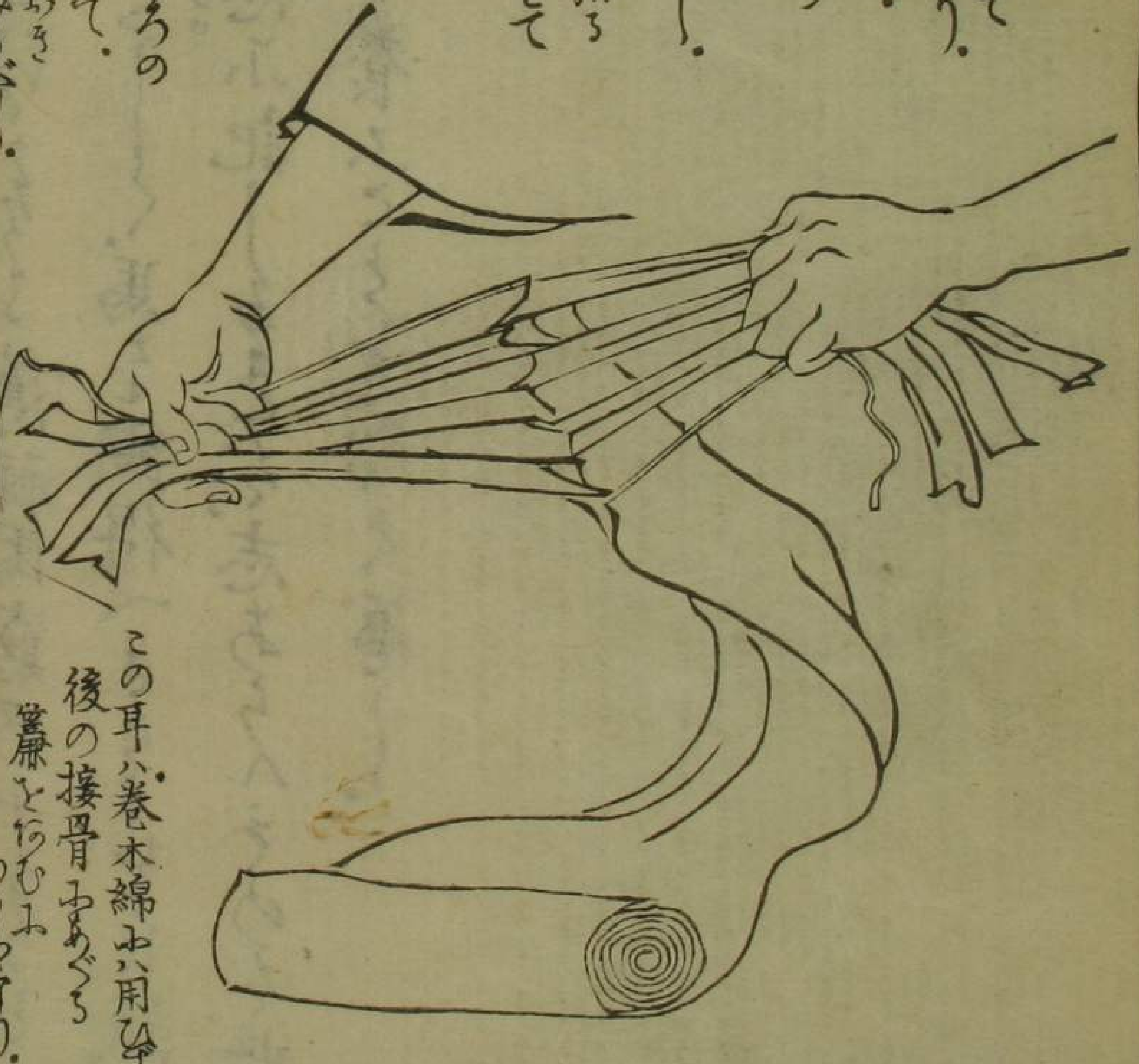
赤螺殻（焼末したるもの）　半夏

右二味等分細末し、先鍼か小刀にて刺し水を出し、此末を米糊に和し、紙にのべて貼おくべし。

以上八方を簡約にして、俗人にも卒に製せらるべき効驗ある方を撰載したるものなれど平常に製しおきて、不虞の用に供ふべし。

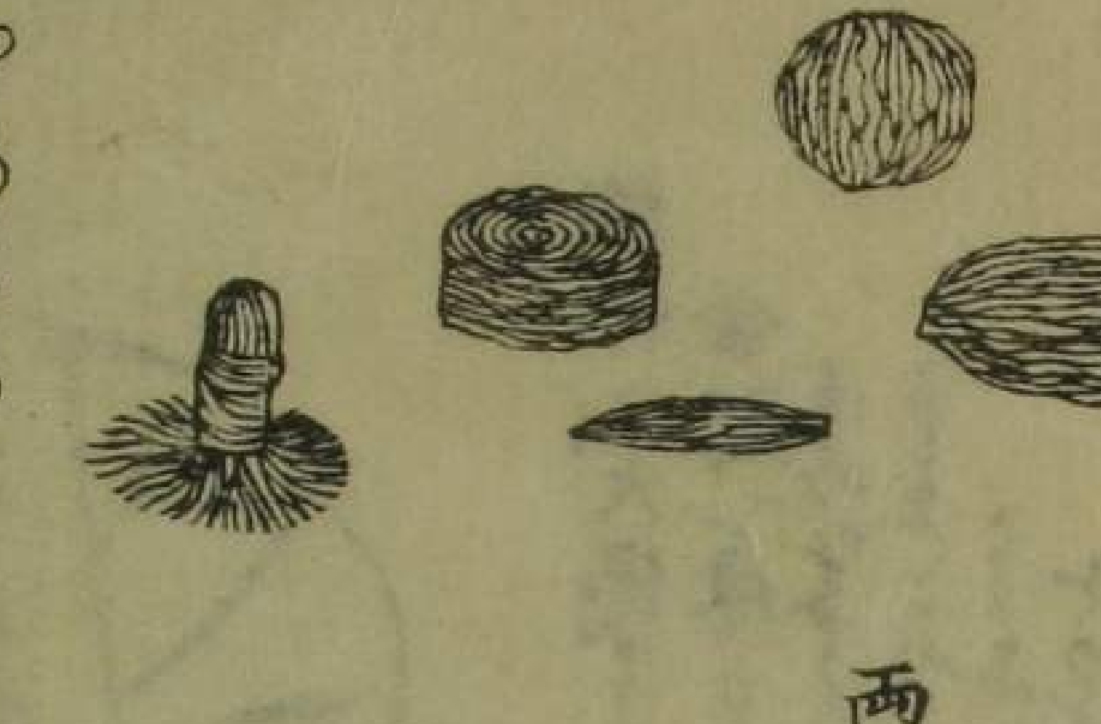
馬乃病を診察するに八候といふことあり。八候とは尿、屎、食、眠、眼、息、舌、毛、腹なるよしの説予が梓行せる厩馬新論中に見えたり。騎馬の士は常によく心得るときには、倉卒に馬の斃ることあるときは、大に益となることなきぞ。その書はいかなる薄禄困窮乃士なりともそれ費少くして馬を飼得べきことを自試みたる事件を懇に記したれば志あらんそのもの此書によりて馬を養ふことを心がくべし。

木綿を
裂にハかくのごとくして
さくなり。
両耳ハのこしおきて。
骨を折たるときの
簾まくあて板を
あむに用ふべし。
金創の裹（マキ）木綿に用る
にハその部によりて
廣さと狭さと
あれども大かたハ
六ツ七ツに
さくべし。
此図ハ往年著せしところの
病家須知に出して。
くはしく記しおきたれ
ばとくとみるべし。



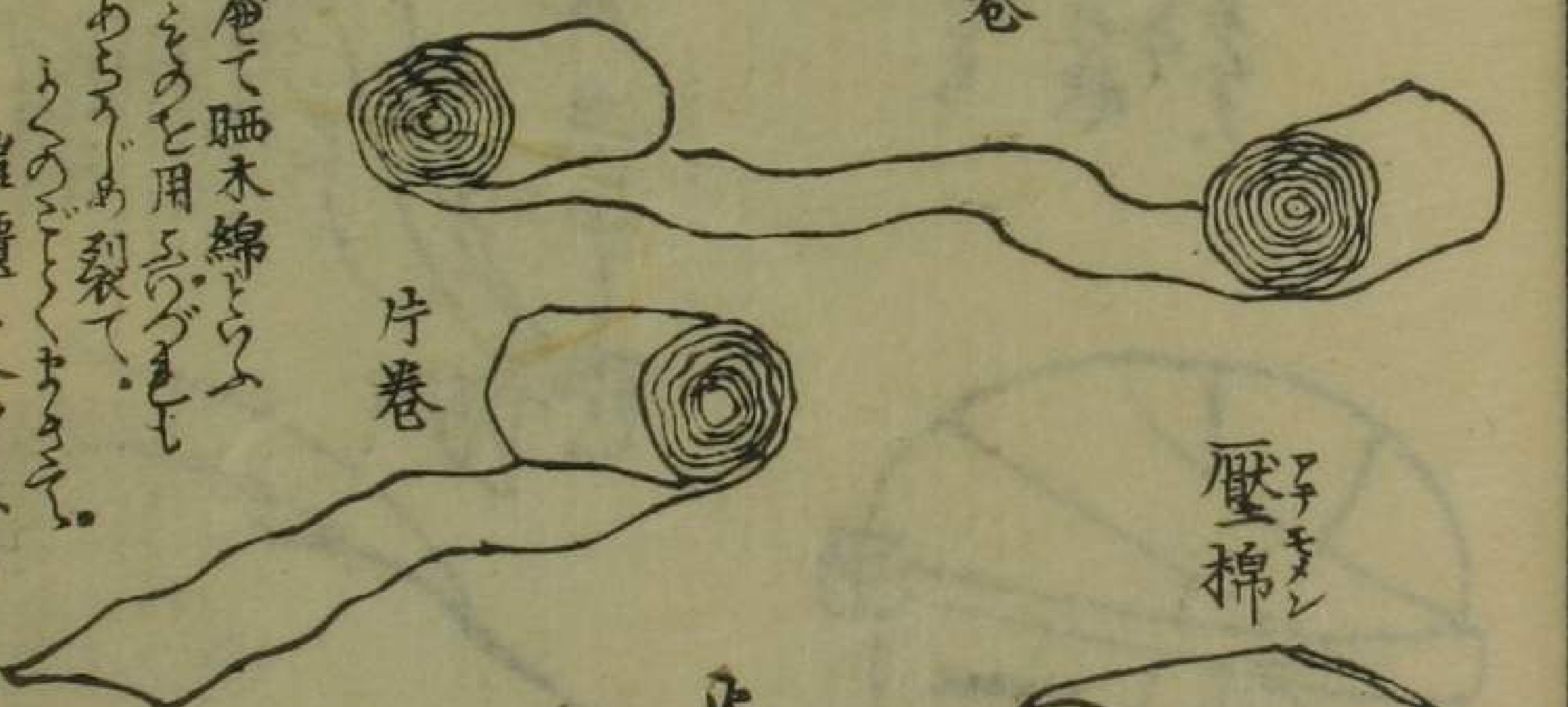
この耳ハ巻木綿にハ用ひず。
後の接骨にあぐる
簾をたゝむに
つかふなり。

撒綿絲（ホツシモメン）



ほつしのかたち
さまざまあれど。
こゝにハそのうち
五種の形を
出す也。

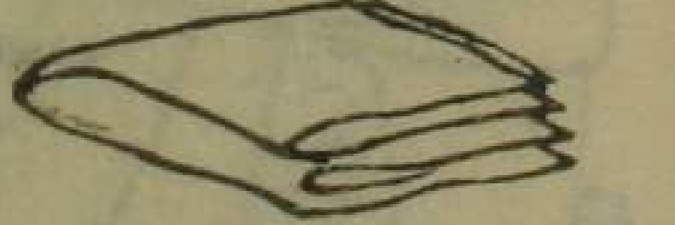
両巻



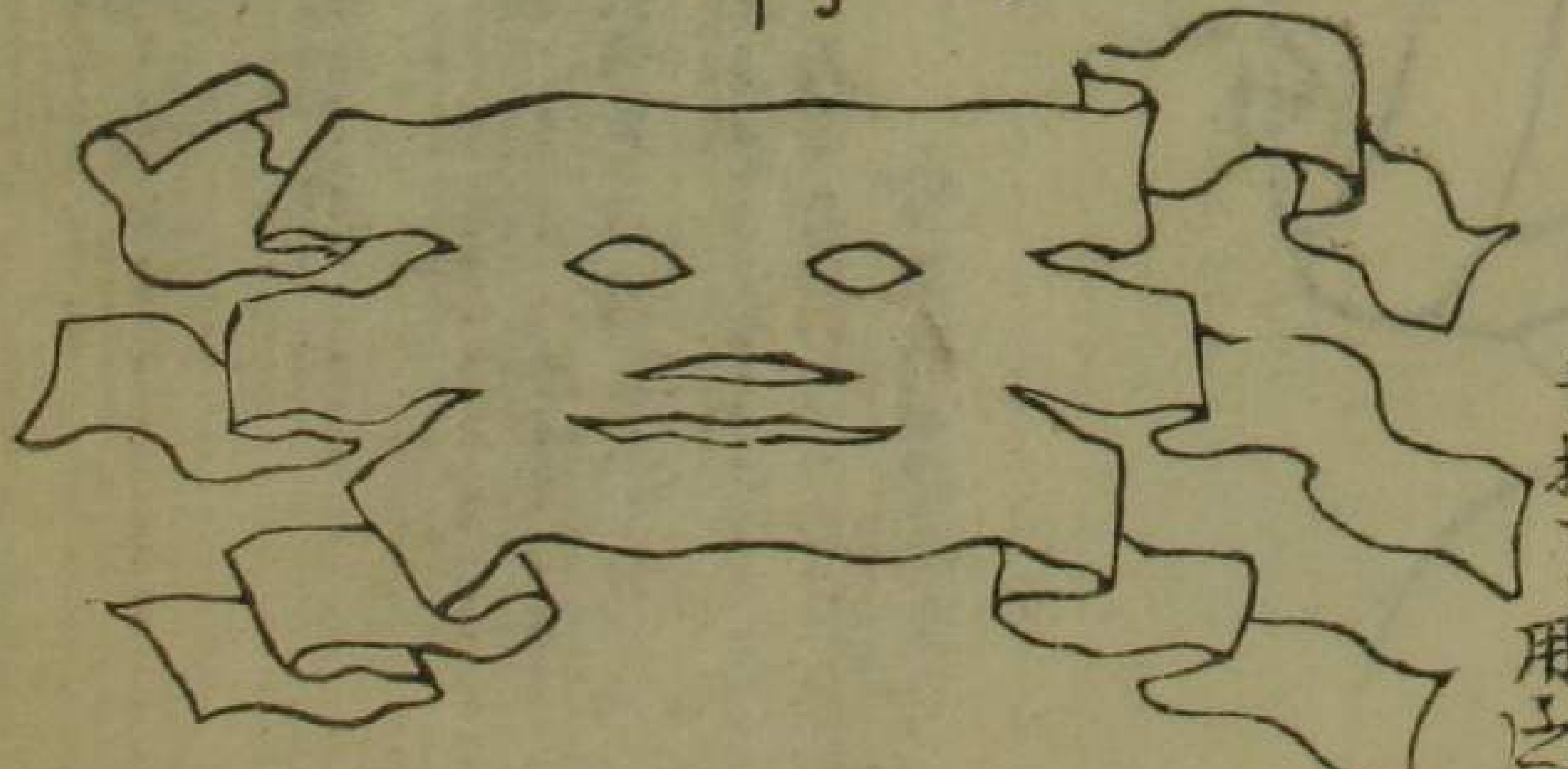
片巻

ま巻て晒木綿といふ
ものを用ふべき也
あらかじめ裂て。
かくのごとくまるめて。
鎧櫃に入おくべし。

壓棉（アテモメン）

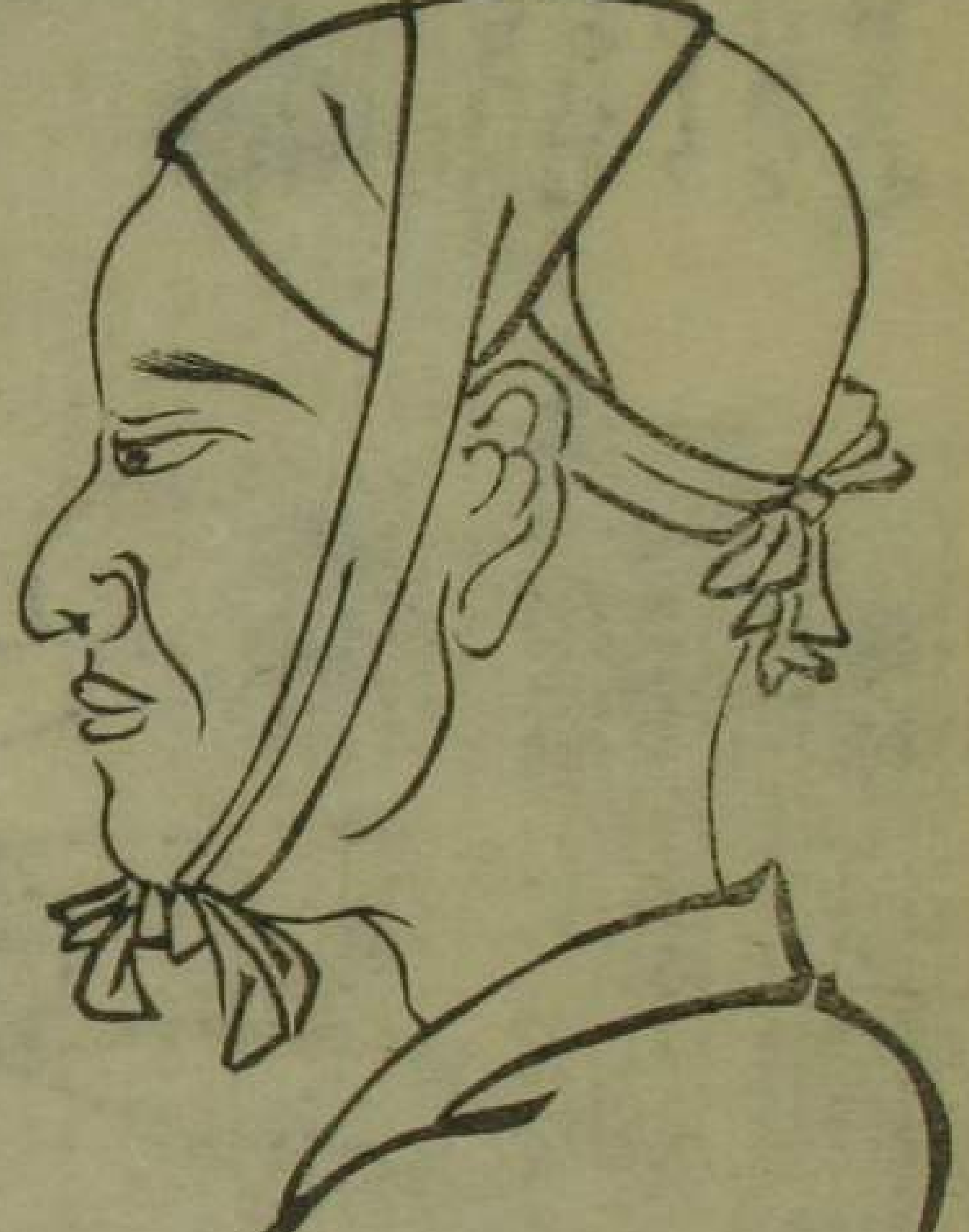


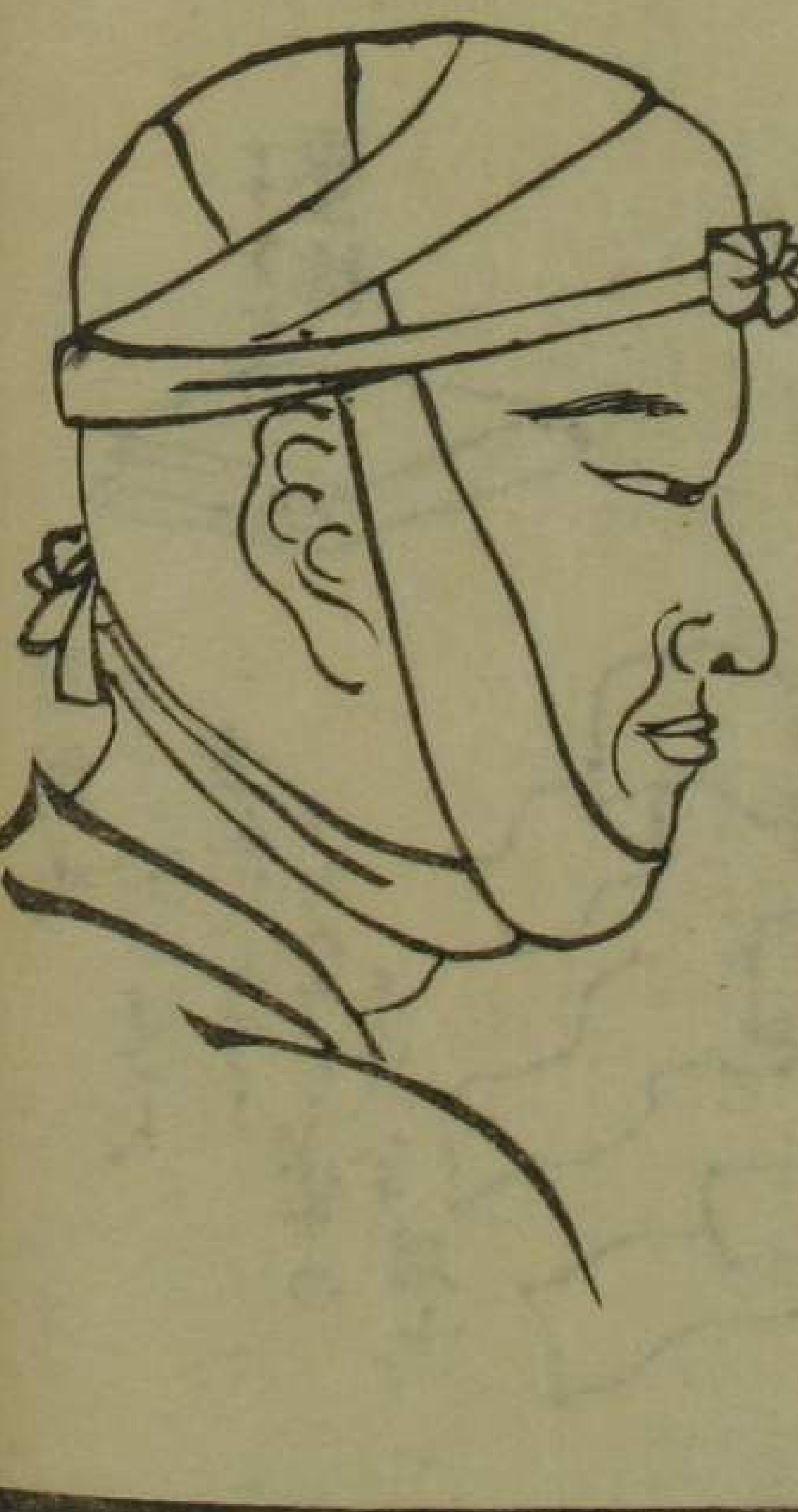
火傷の
面へ
あつる
布



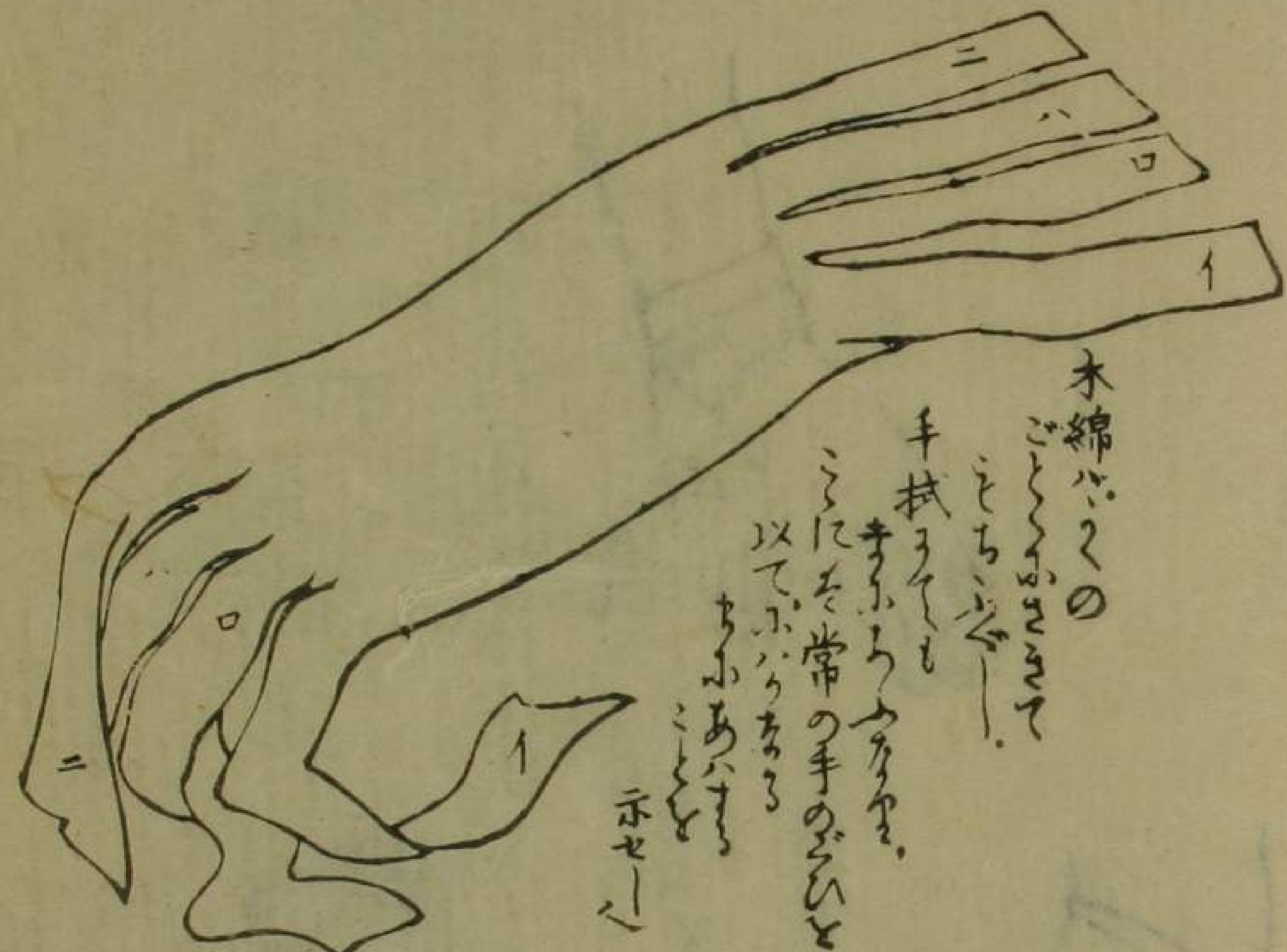
愈創水。
またハ醋に浸て。
金創へあてゝ
もめんなりとも常の
手拭なりとも用ゆべし。

頭部に大傷または
金創を得る
そのきずぐちを
まきかたあり。
こゝに三の状
をならべて
示めす。

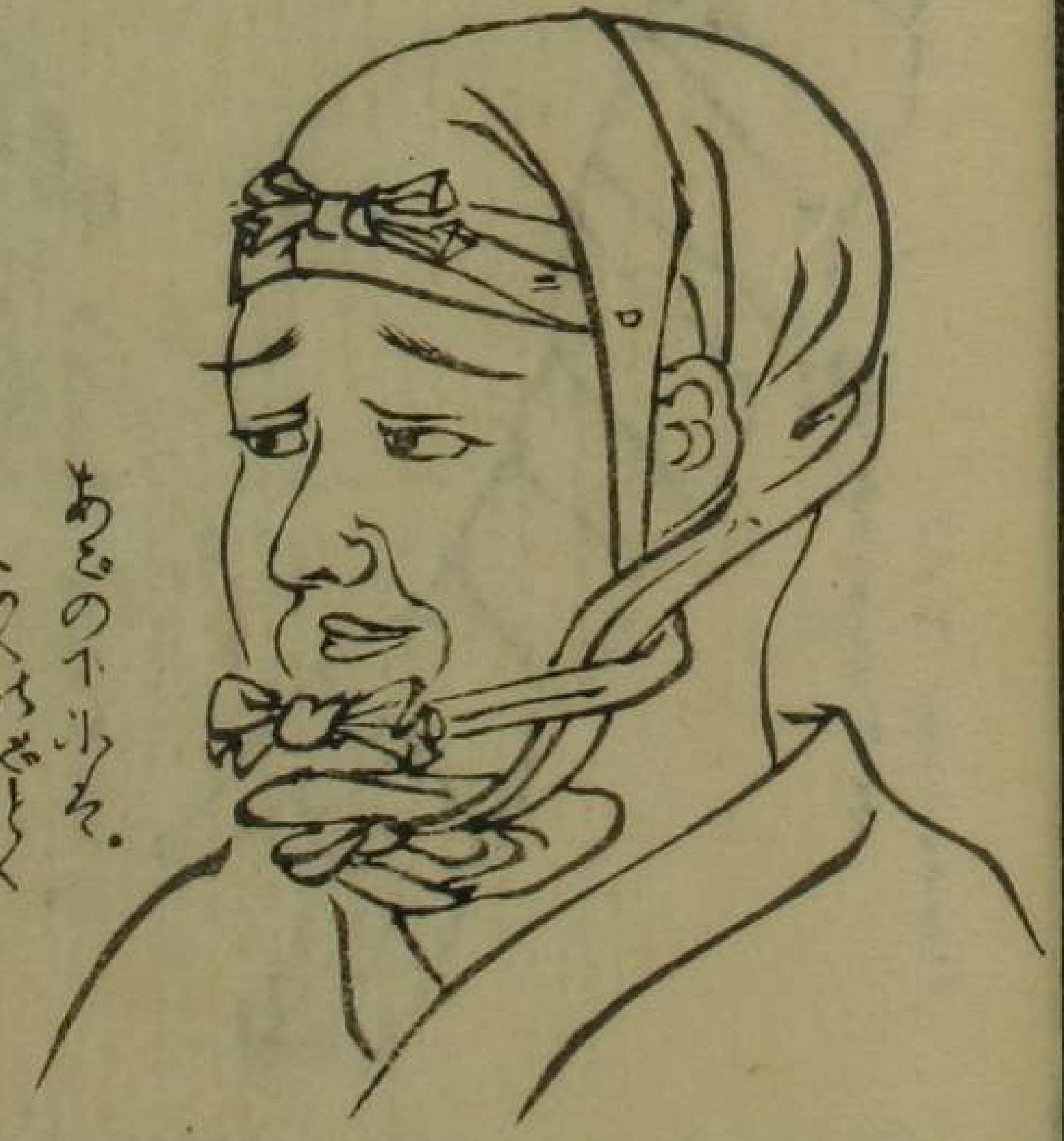




繃縛（マキモノ）ハ頭部を
よくまくことを
心得れバ外ハ皆
知らるゝことゆゑに頭の
真の繃縛ハ病家須知
六の巻に図を出して
詳に記しおきたりしを
みるべし。こゝに出せるハ
皆その畧法なり。

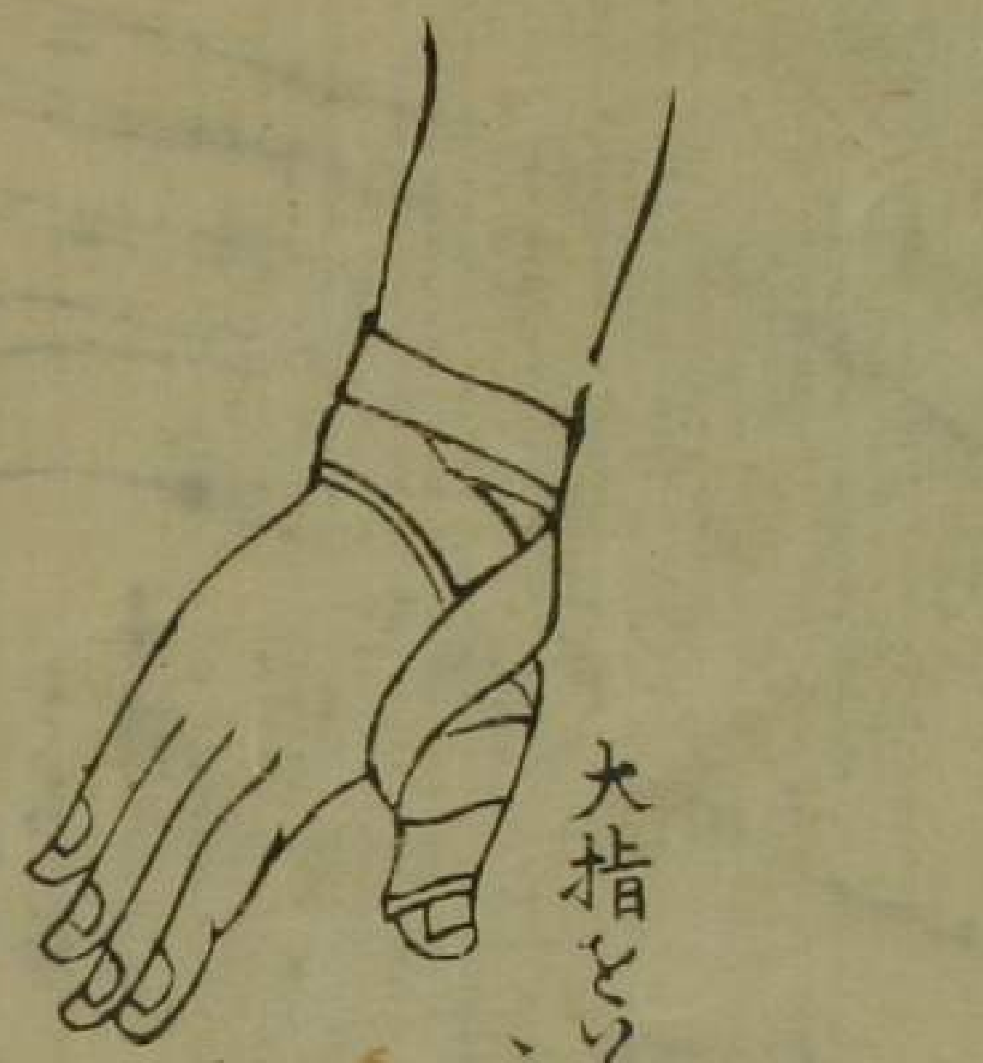


木綿ハなくの
ごとくにさきて
もちふべし。
手拭にても
まにあはせて。
これぞ常の手のごひを
以てぬひある
ちがひあはする
ことを
示せし

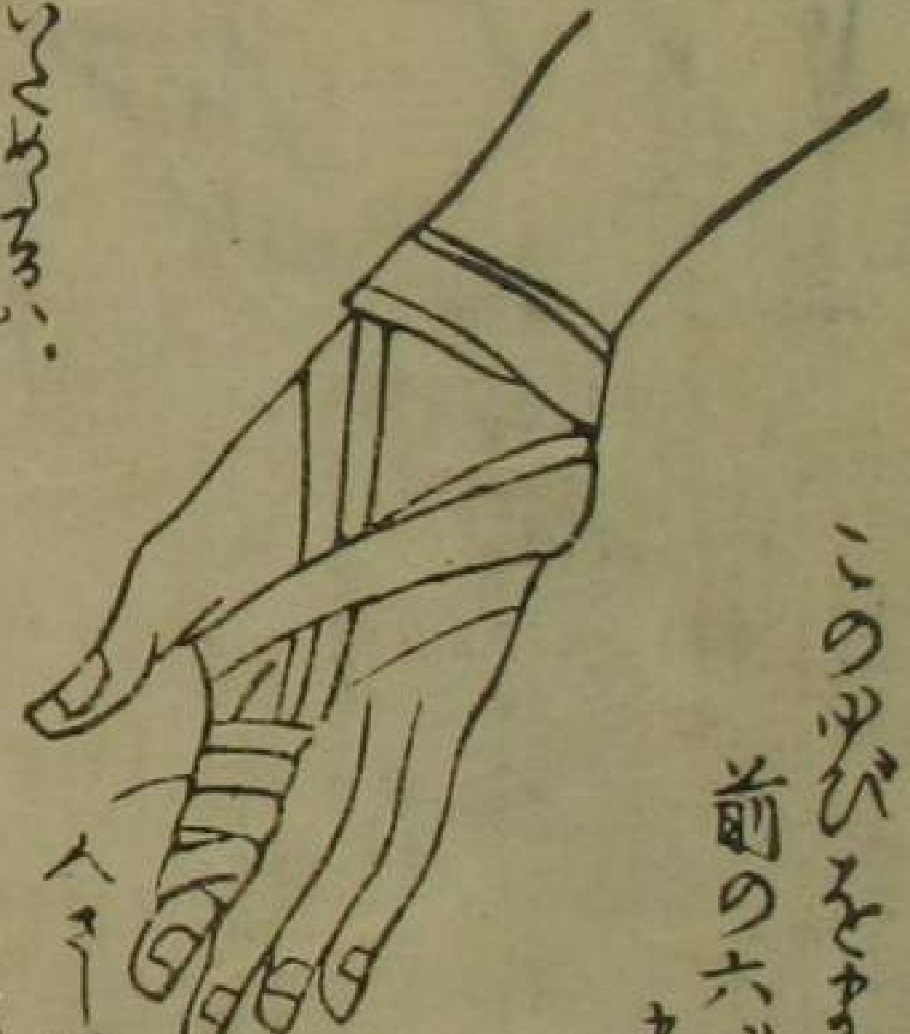


あごの下にて。
かくのごとく
別に木綿を
くゝりあてぬれバ
飲食言語に
さはりなし。

イの印の布を
額へあてゝ後に
くゝり。
二の印を
前額へ廻して
あまりハ印を耳のうしろより
あごの下へまはし口印ハ耳の前より
下くあごの前へくゝるべし。

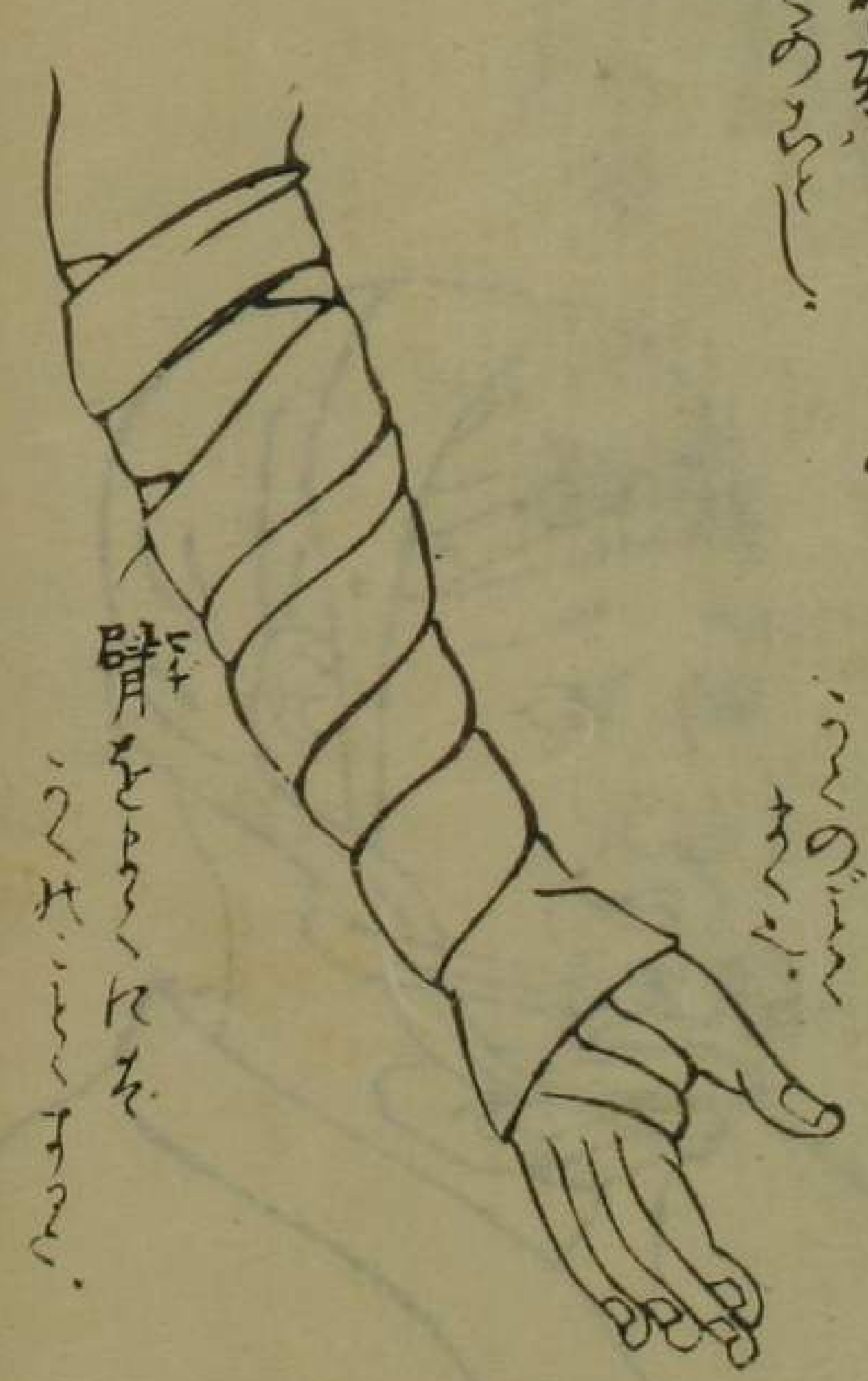


大指をいためたるハ。かくのごとし。

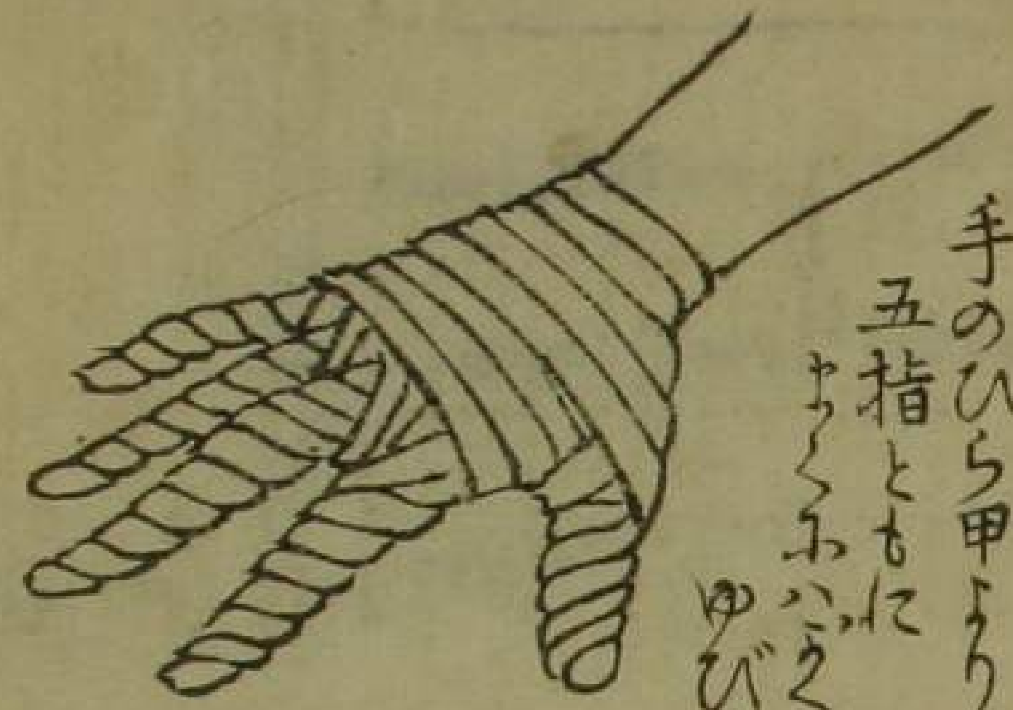


このゆびをまくにハ。前の六ツ七ツにさきたるを。また二ツにさきて巾のせまきをまくべし。

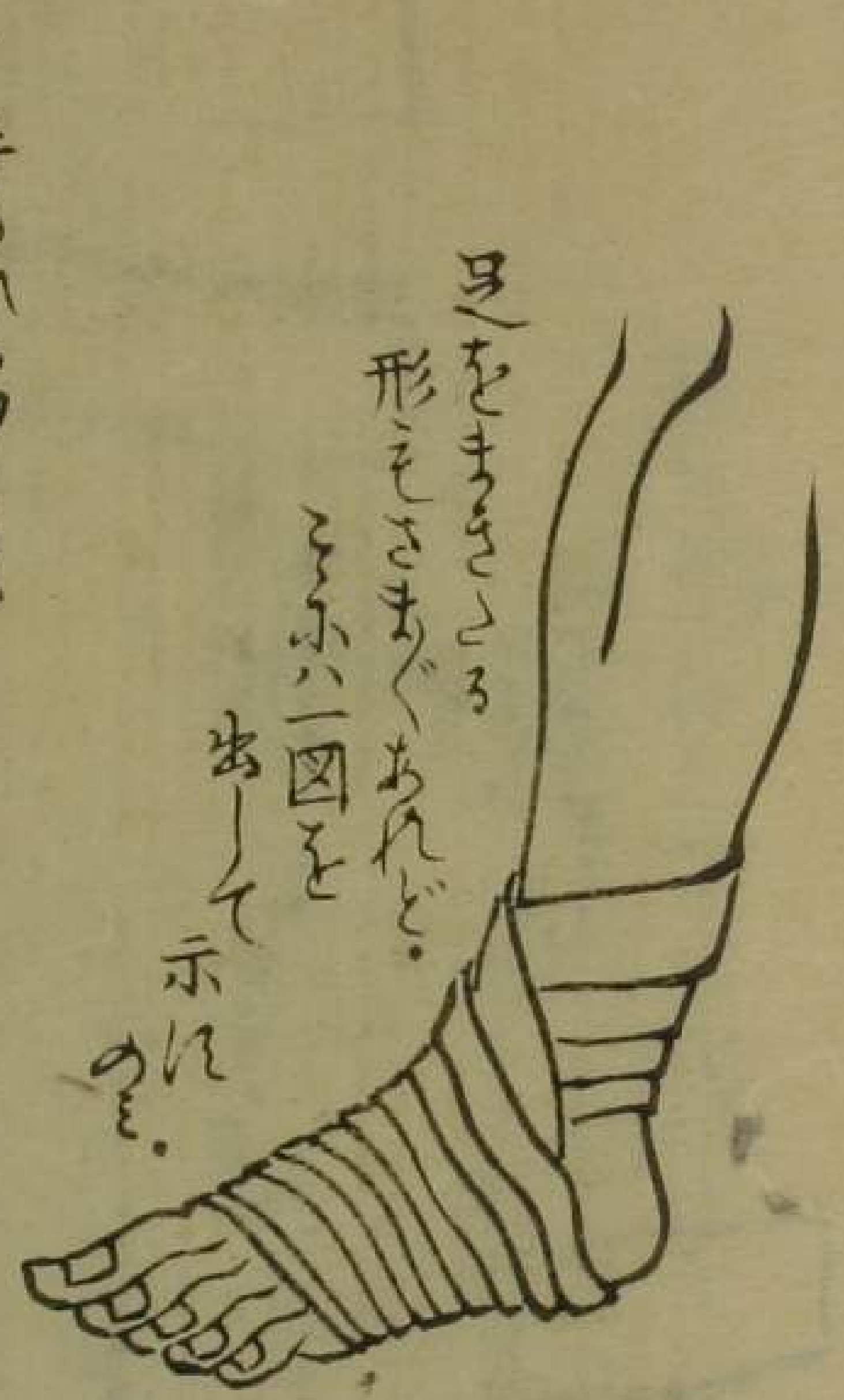
人さしゆびをいためたるハ。かくのごとくまく。



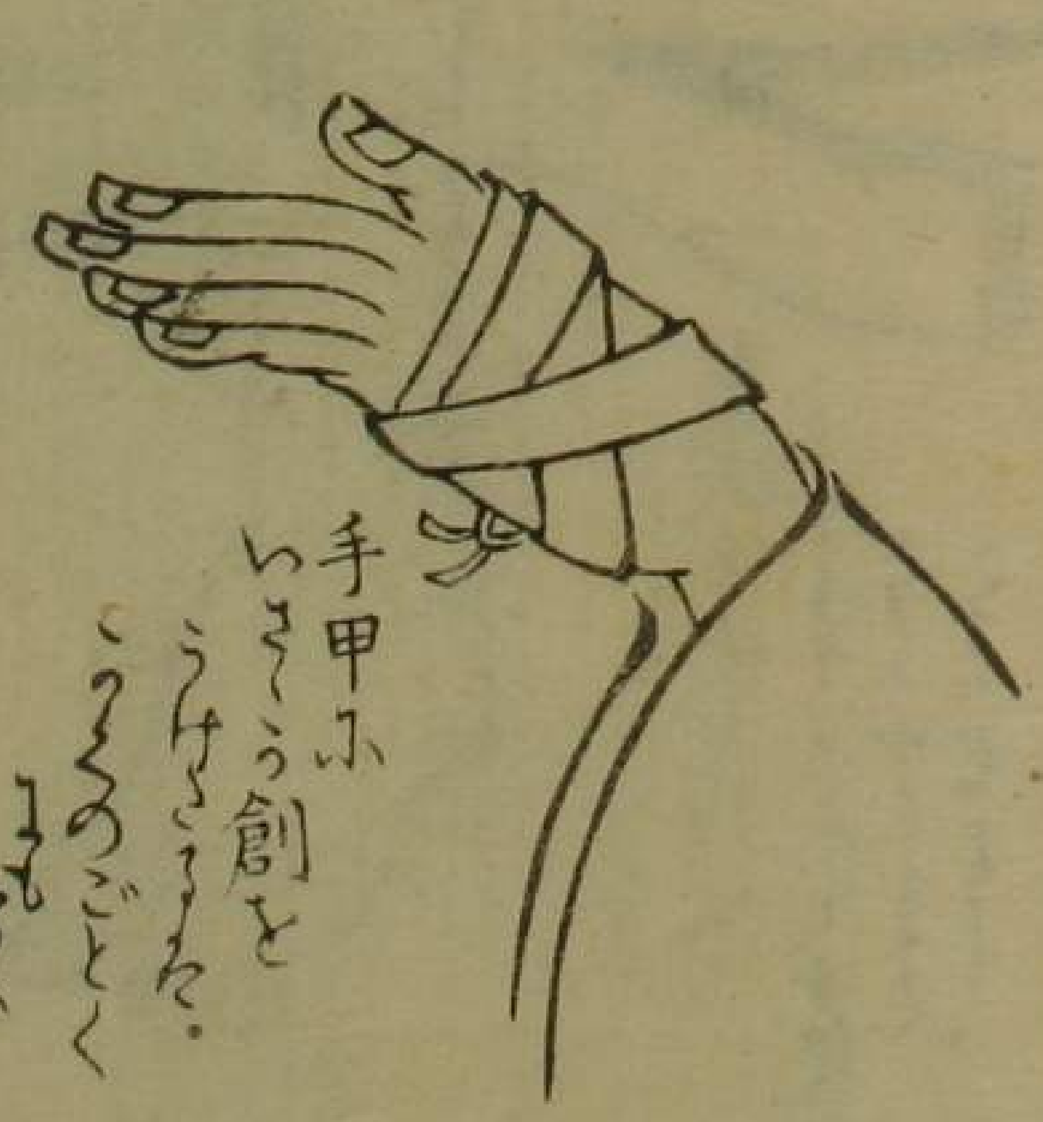
臂（ヒヂ）をいためたるにハかくのごとくすべし。



手のひら甲より。五指ともにまくにハかくのごとくにて。ゆびハ巾狭き布をもてまくべし。



足をまきたる形もさまざまあれど。こゝに一図を出して示すのミ。

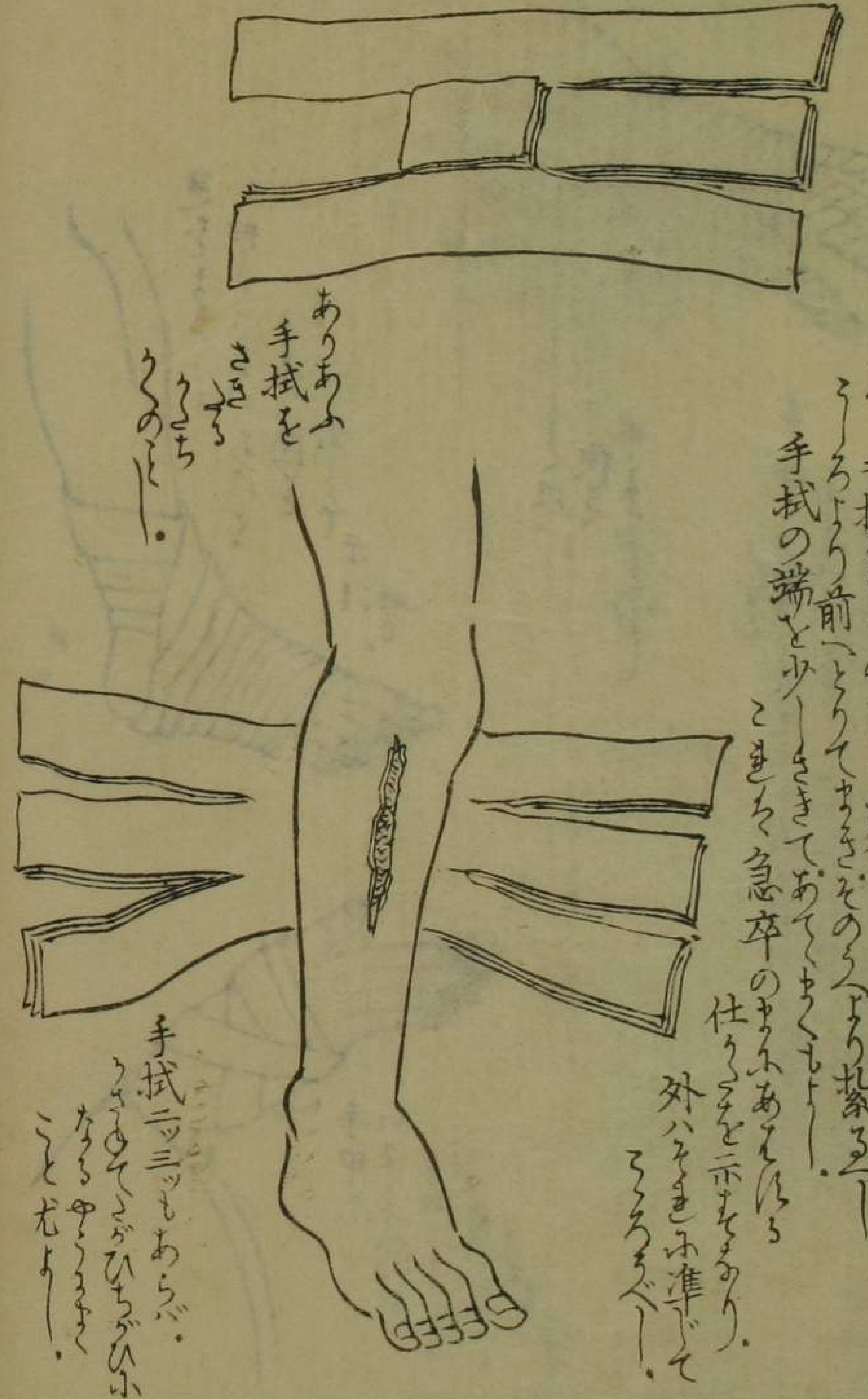


手甲にいたる創をうけたるハ。かくのごとくにもまくなり。

総て裹帘（マキモメン）ハ定りたる法あるにもあらず。その人の作略をもて時にのぞみていかやうなるもまかるゝことなれバこゝにそのあらましを出して示したるのミ。緊（キツ）く縛（シバ）れバ患者そのくるしミに堪がたく緩きハ効なし。緩急その中を得るにあるのミにて事なき時にしばしばまきてみれバおのづから知らるゝなり。

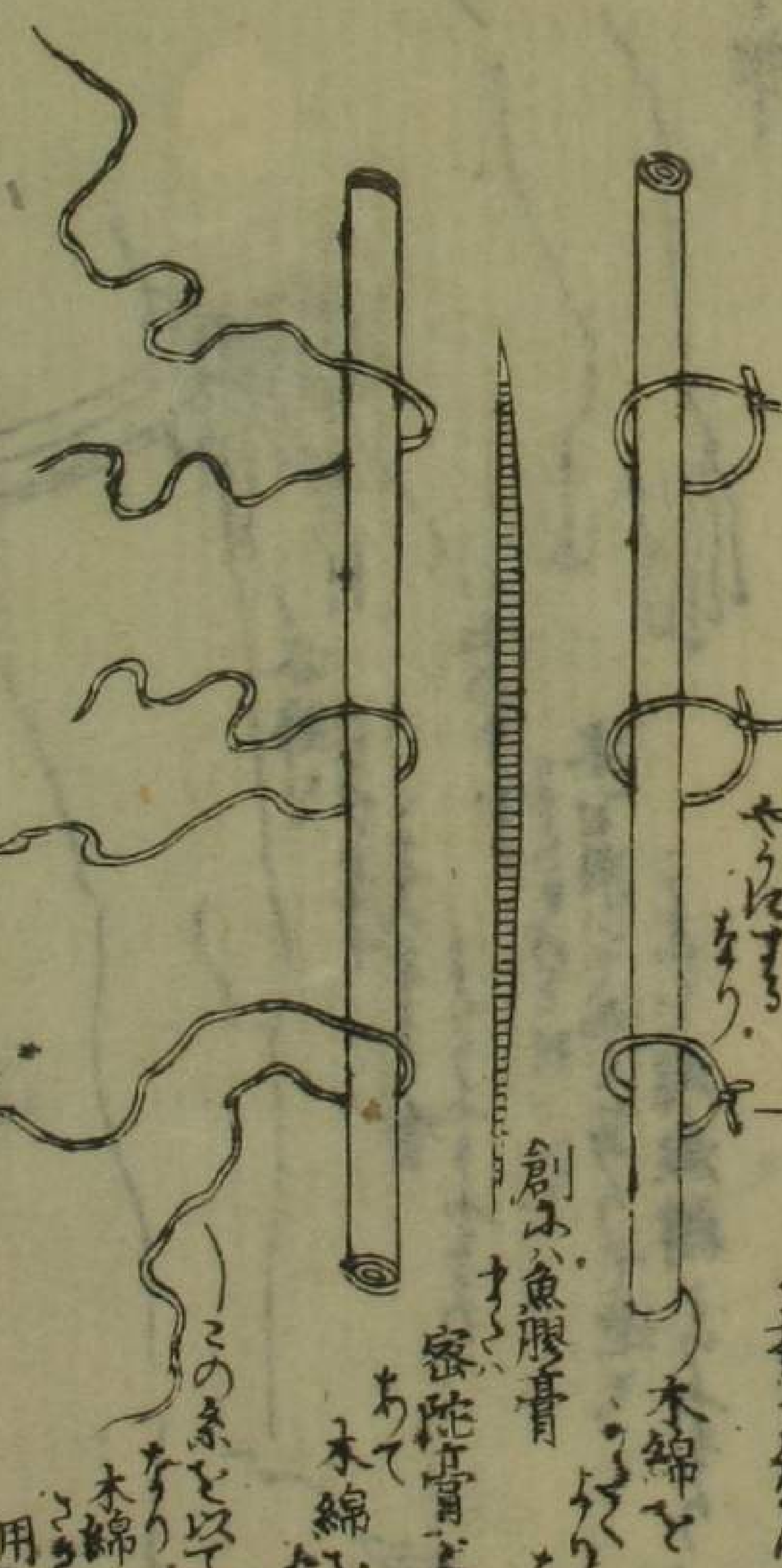
脛のむかふずねへ創をうけたるをさしあたり手拭ありあふて自らあつかふにハ水あらバ血をあらひおとして帯をとかしてあて、手拭をかくのごとく裂きたるをうしろより前へとりてむすびそのうへより扎紮るべし。手拭の端を少しさきてあてゝおくもよし。

こまかく急卒のときにあてたる仕かたを示すなり。外ハそのときに準じてこゝろうべし。


ありあふ手拭をさきたるかたちかくのごとし。

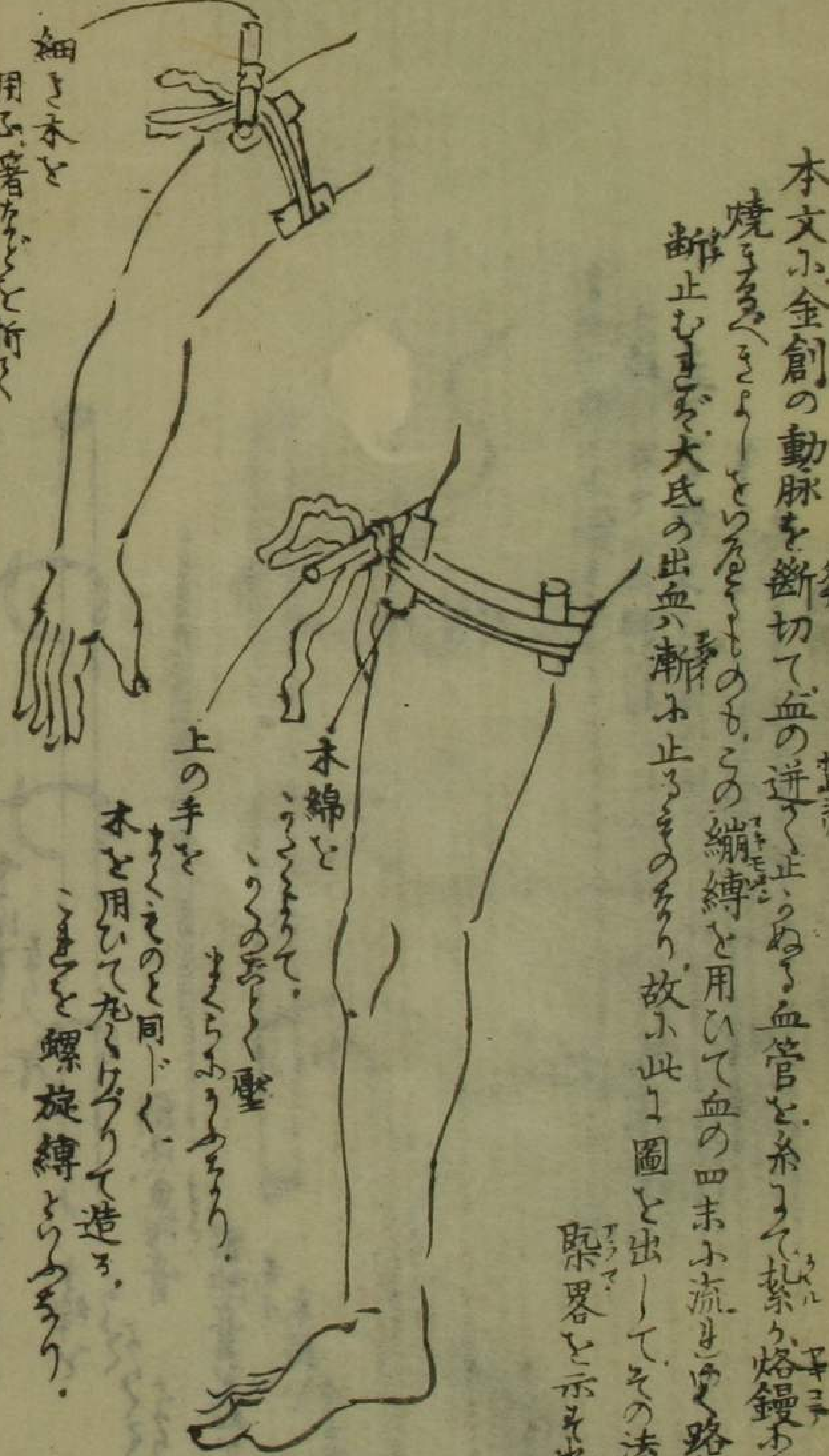
手拭二ツ三ツもあらバうちかさねてさがひちがひになるやうにまくこと尤よし。

腹を竪に切られて創浅きを、速にまくことこの状のものを造へて左右より創を壓て合するやうにするなり。


まくのうへをよく巻るなり。
木綿をふとくよりくるなり。
創にハ魚腹膏または密陀膏など貼てあて木綿をかさぬる也。
この糸を以てくゝるなり。
木綿のこよりを用ひても可。

さて腹上に創をうけたるときまくにハ脛を縛る布の如く木綿に一布にて両端を裂きたるを仰臥したる患者の背へ並べおきたる如くにして左右よりひきてちがひちがひにまきてよし。長き木綿を用ふれバ背へ廻しがたくたびごとに患者の體うごきてあしかれバ此旨をよくこゝろえ置べし。

本文に金創の動脈を断切て血の迸て止らざる血管を糸にて紮り烙鐵にて焼べきよしをいへるもあれども、この繃縛を用ひて血の四末に流れゆく路を断止むれば大抵の出血は漸に止るものなり 故に此に図を出して其法の概略を示すなり。



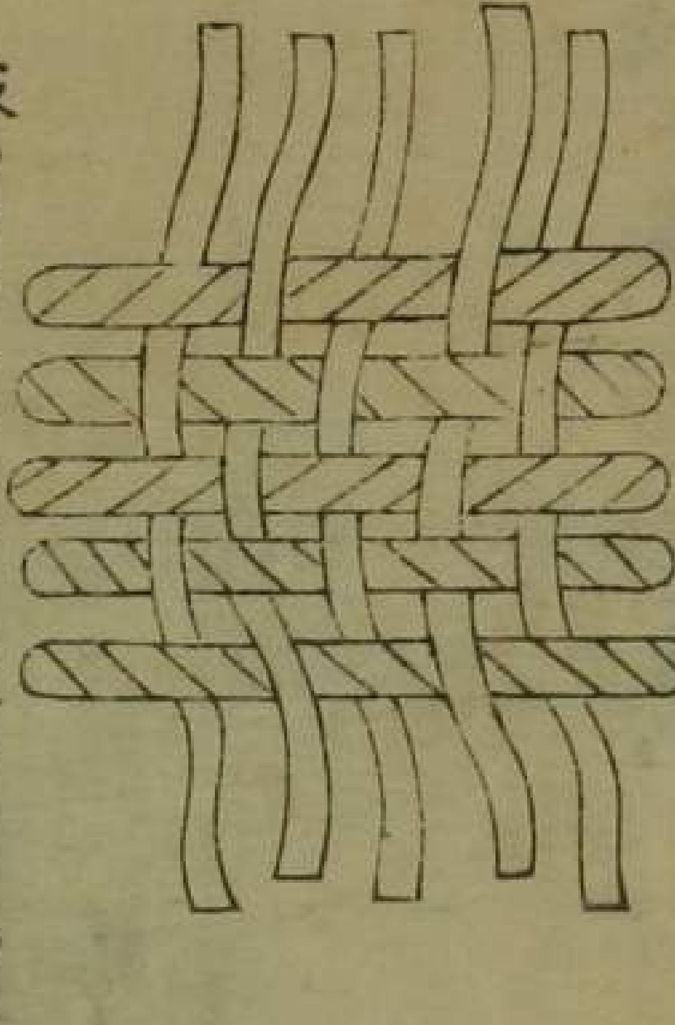
細き木を用ふ箸などを折て時のまにあはするもよし。

此木にてねぢて締ときは血管の流れゆくを壓て止るなり。

木綿をつゝみて、いくのごとく堅まくらにするなり。

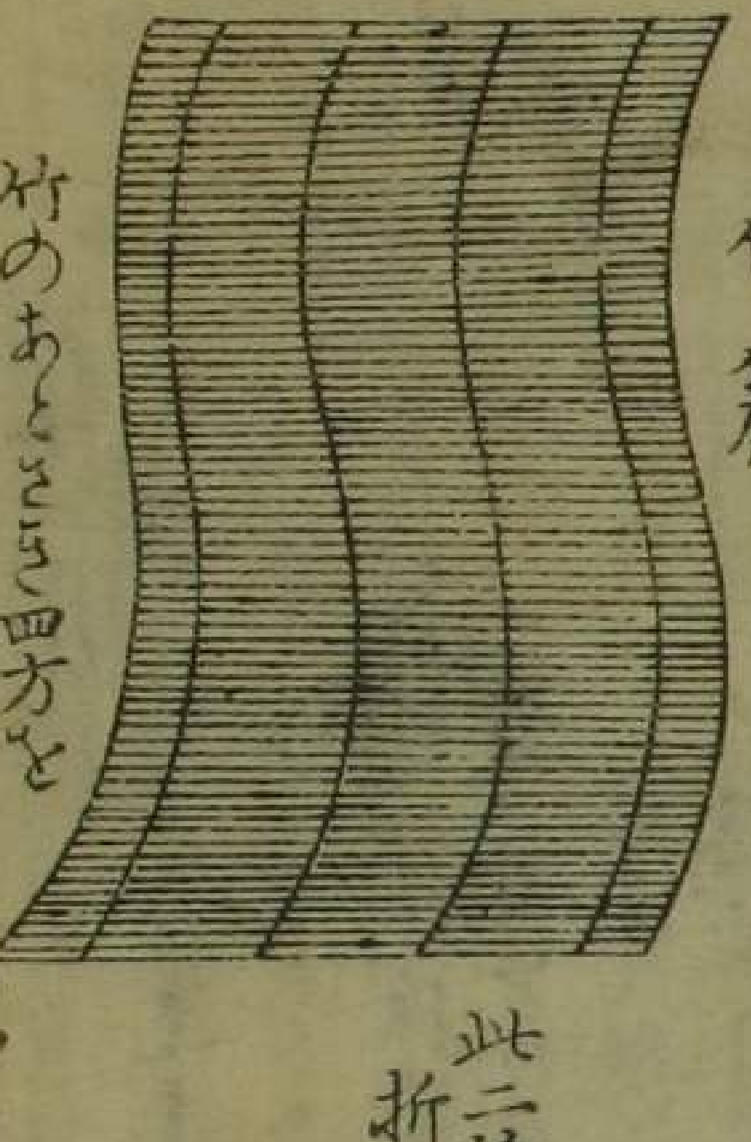
上の手をまくその木と同じく木を用ひて丸くけづりて造る。これを螺旋縛といふなり。

板籬



板の巾四五分厚さ二三分にしておもてうらを丸くして四方の角をも丸くけづり紙にてつゝみ糊にてとむる裂木綿のつよきものまたは麻を用ひてあむ。

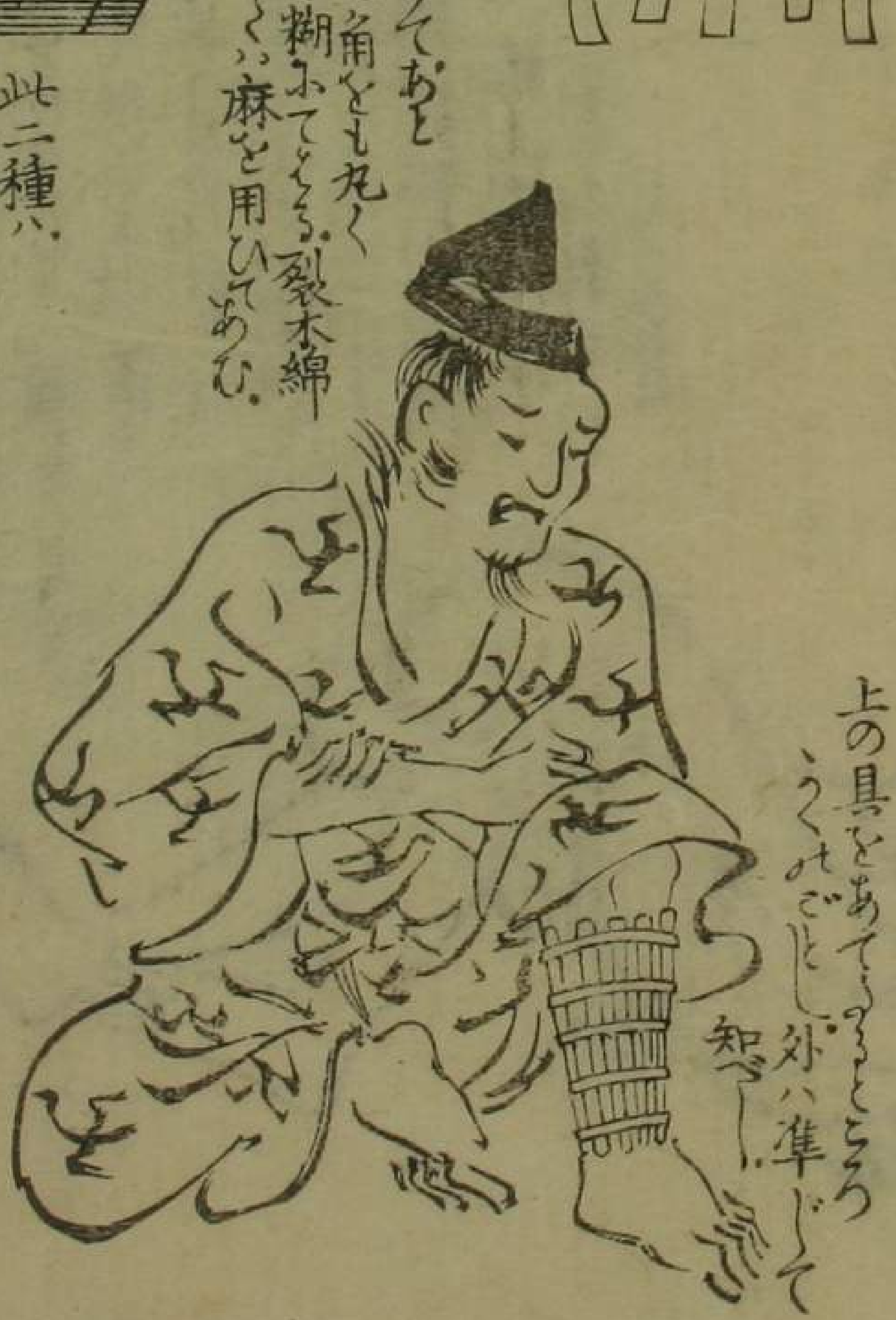
竹簾



竹のあとさき四方をよくけづりてあさにてあむなり。

この二つのうちあるにまかせてこしらふべし。

此二種は、折たる骨にあてゝまくこと、本文に記しあるをみるべし。

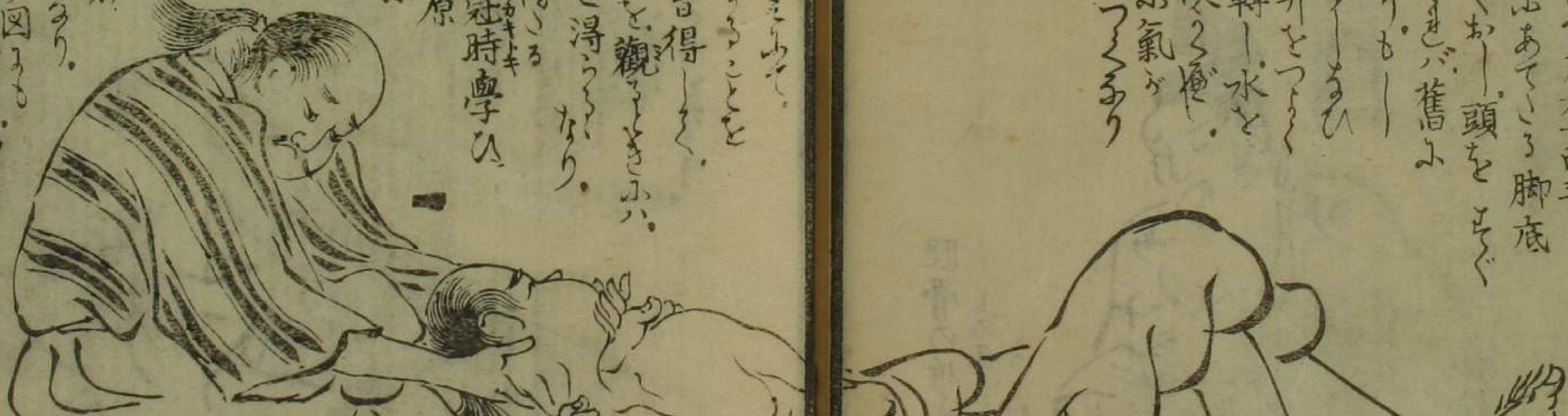


脛骨の折たるに、上の具をあてゝまきたるところ、うでもごとし。外は準じて知べし。

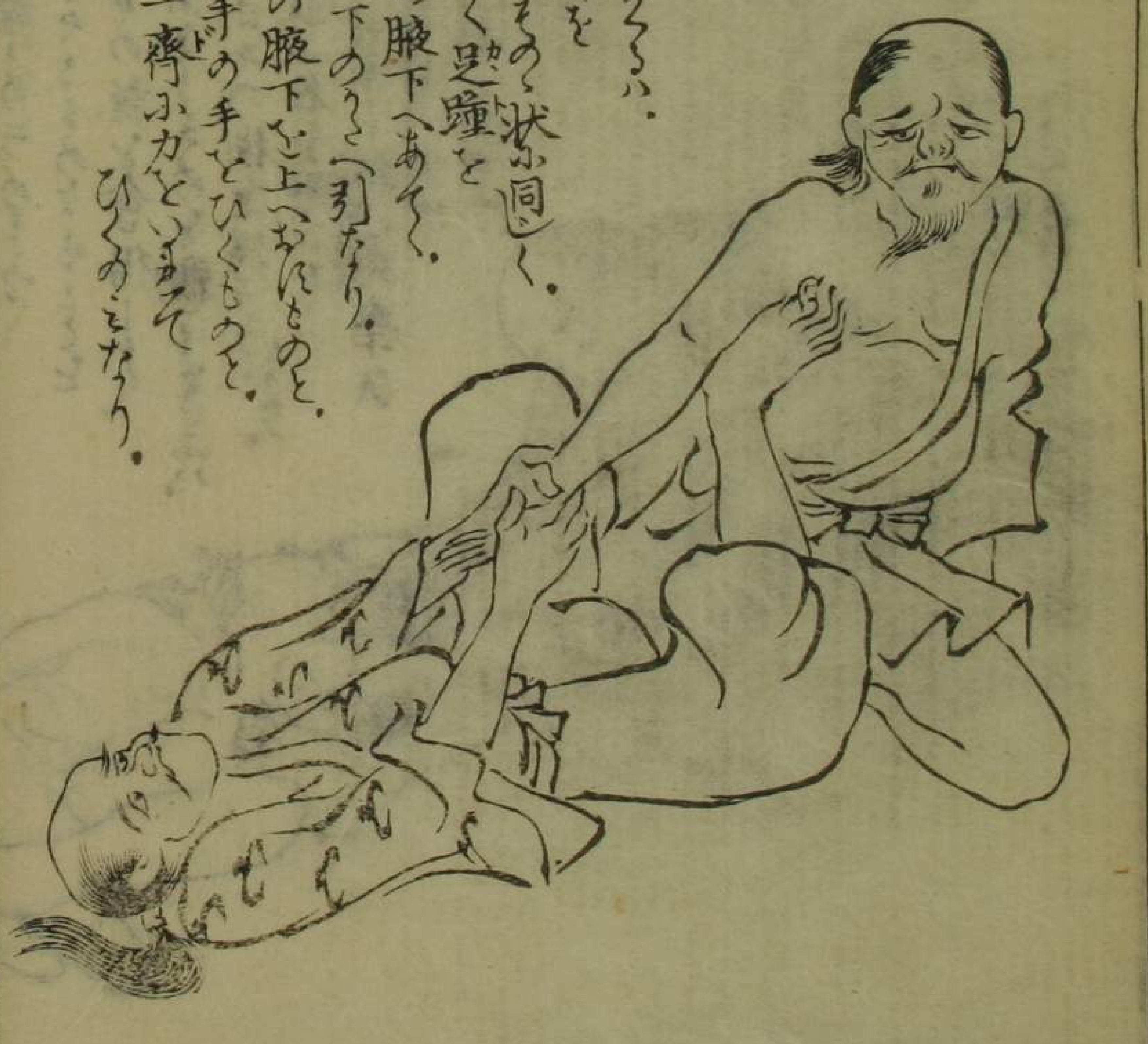
項骨を閃挫するハかくの如く患者を
横に臥させ患者の肩へ両脚をかけ
項と腮へ手をかけて左右へ両三ど
迴轉して後肩にあてたる脚底を
以て肩をつよくおし頭をすぐ
にして曳なれバ舊に
復するなり。もし
患者氣をうしなひ
たらバ肩井をつよく
摑て迴轉し水を
顔に吹かくれバ
忽に氣が
つくなり

以下圖あるところハ。
ことごとく
本文に人爲の曳弛（ヒツパル）と。

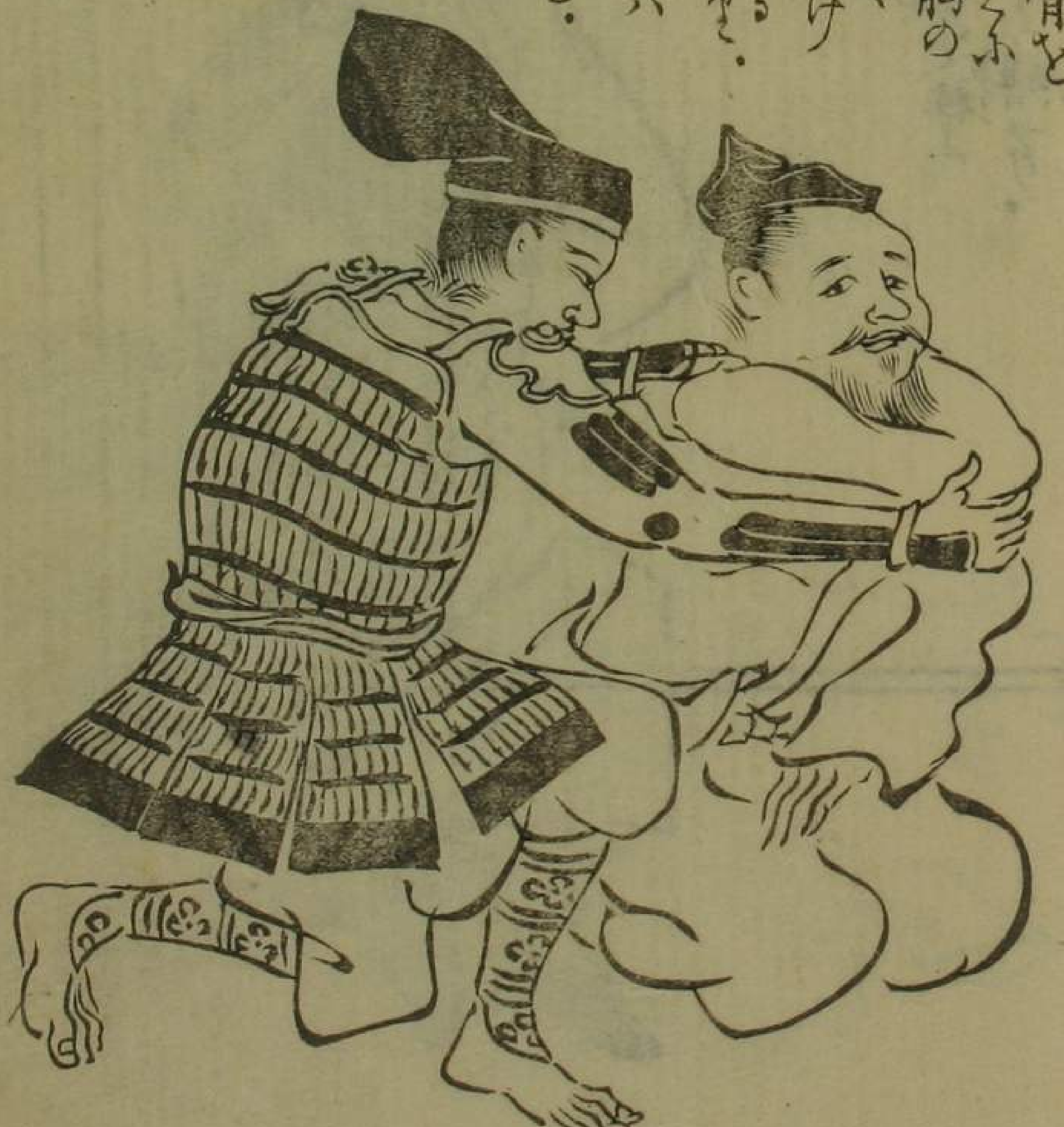
自然の牽縮（ヒキチヾミ）との二ツの意にして。
閃挫（クジキ）ハ治するにそのなすことを
しるまでその說を會得しがたく。
図に出すところのものを觀（ミ）るときにハ。
速にその術を得らるゝなり。
往時難波に名を得たる
正骨科友予が弱冠時（トシワカキトキ）學ひ
たりし長壽の吉原
隆仙が術今此世に
名を得たりし
或人の正骨の
技を其極旨ハしらねど
このころさふひけバ
なきぞにいたる
自然の所爲
まかせたる外に
術ハなきことをしるなり。
ゆゑに下の図をも
ことごとく辨じて讀者よく
この意を得て理解すべし。



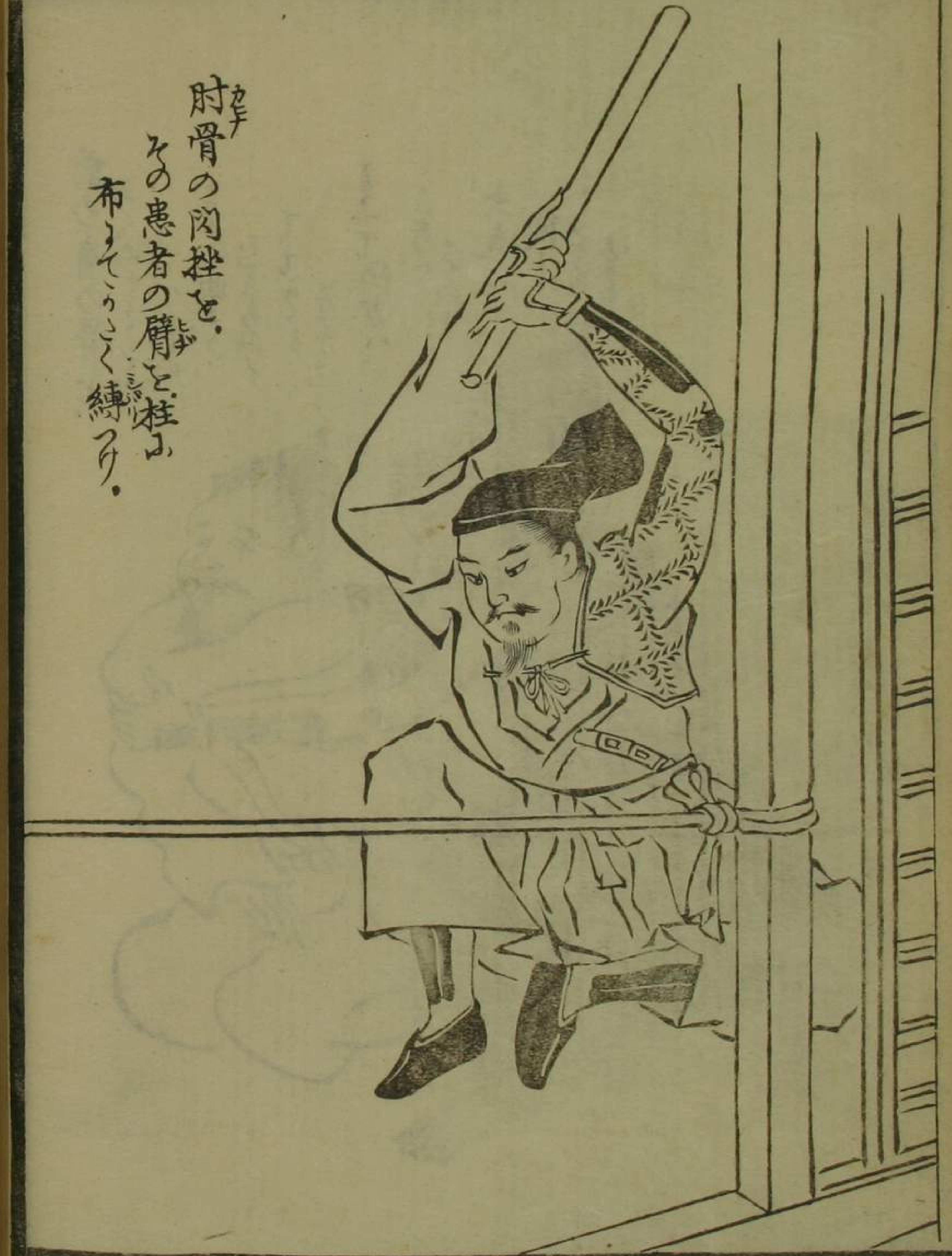
肩の骨をうつるハ．
前ハ項骨を
なをすそのゝ状ニ同じく．
うくるごとく足踵を
患者の腋下へあて．
手を下のうしろへ引なり．
足踵の腋下を上へおしたものと．
両手の手をひくものと．
一齊ニ力をいれて
ひくのことなり．



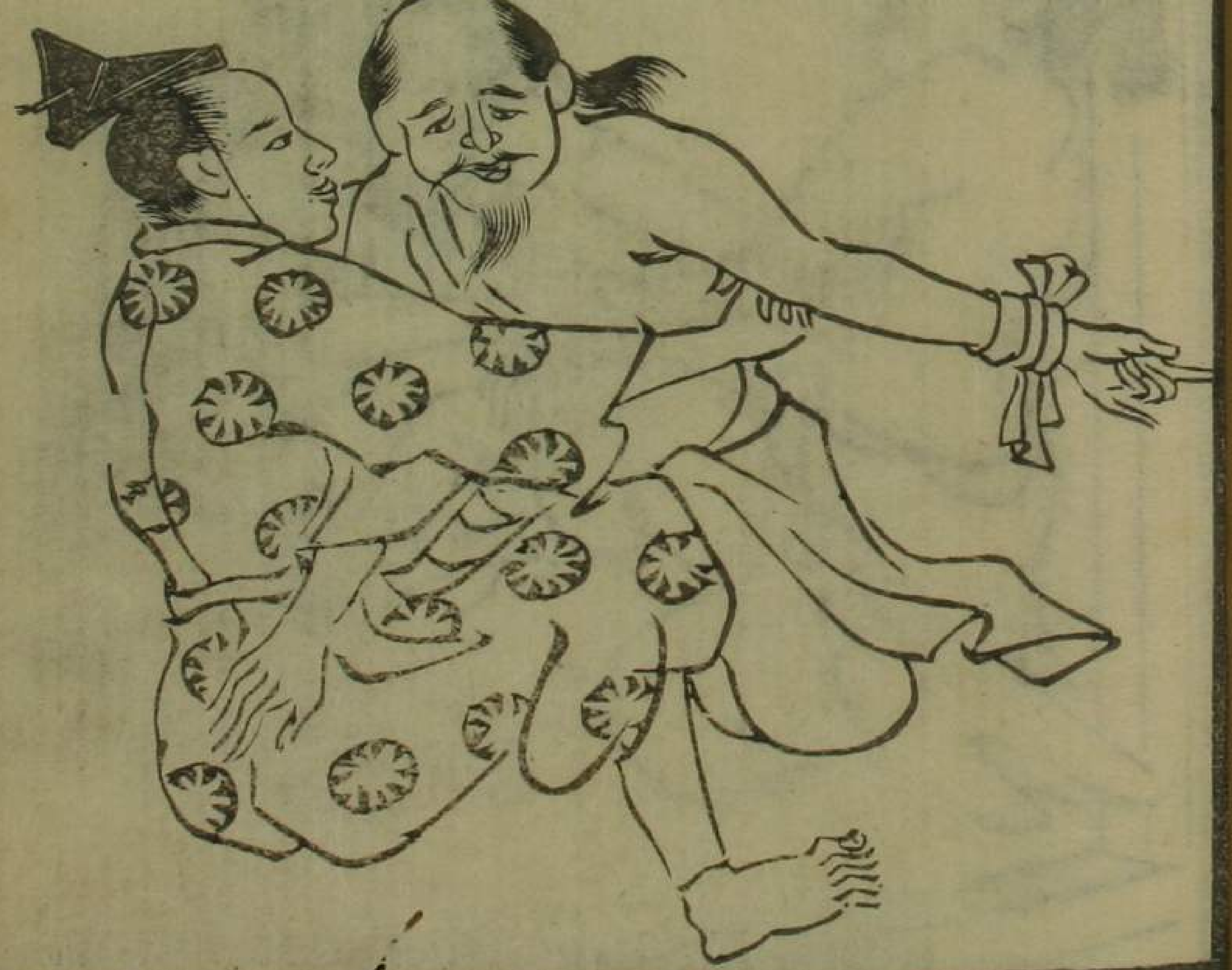
前の肩の骨を．
うくのごとくに
して胸の
うしろへ曲て
ひきつけ
てもうつる
なり．
すべて仕方ハ
さまくあれど．
大意ハ
同じ
ことなり．



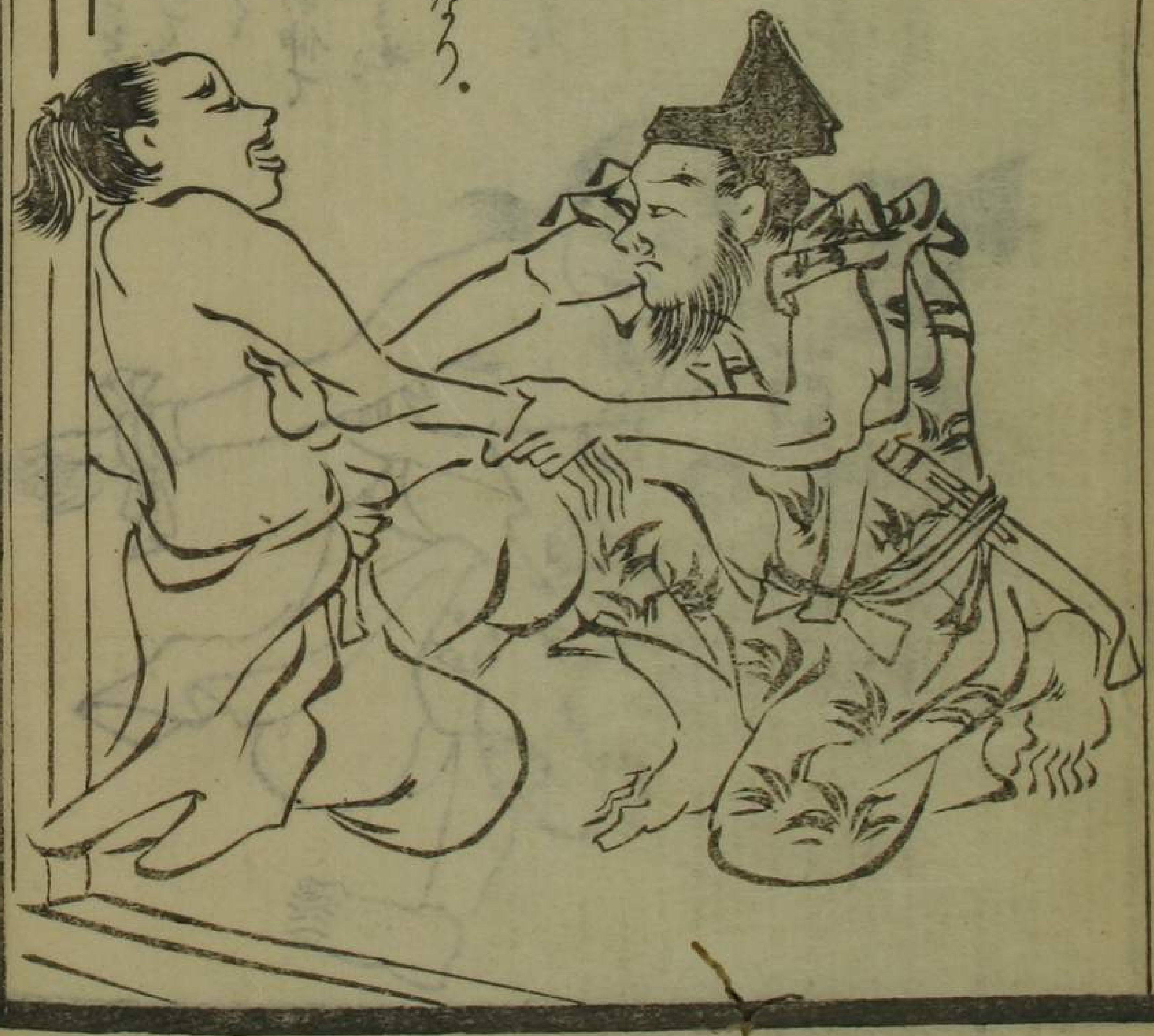
肘骨の閃挫を。
その患者の臂と。柱に
布にてかたく縛り。



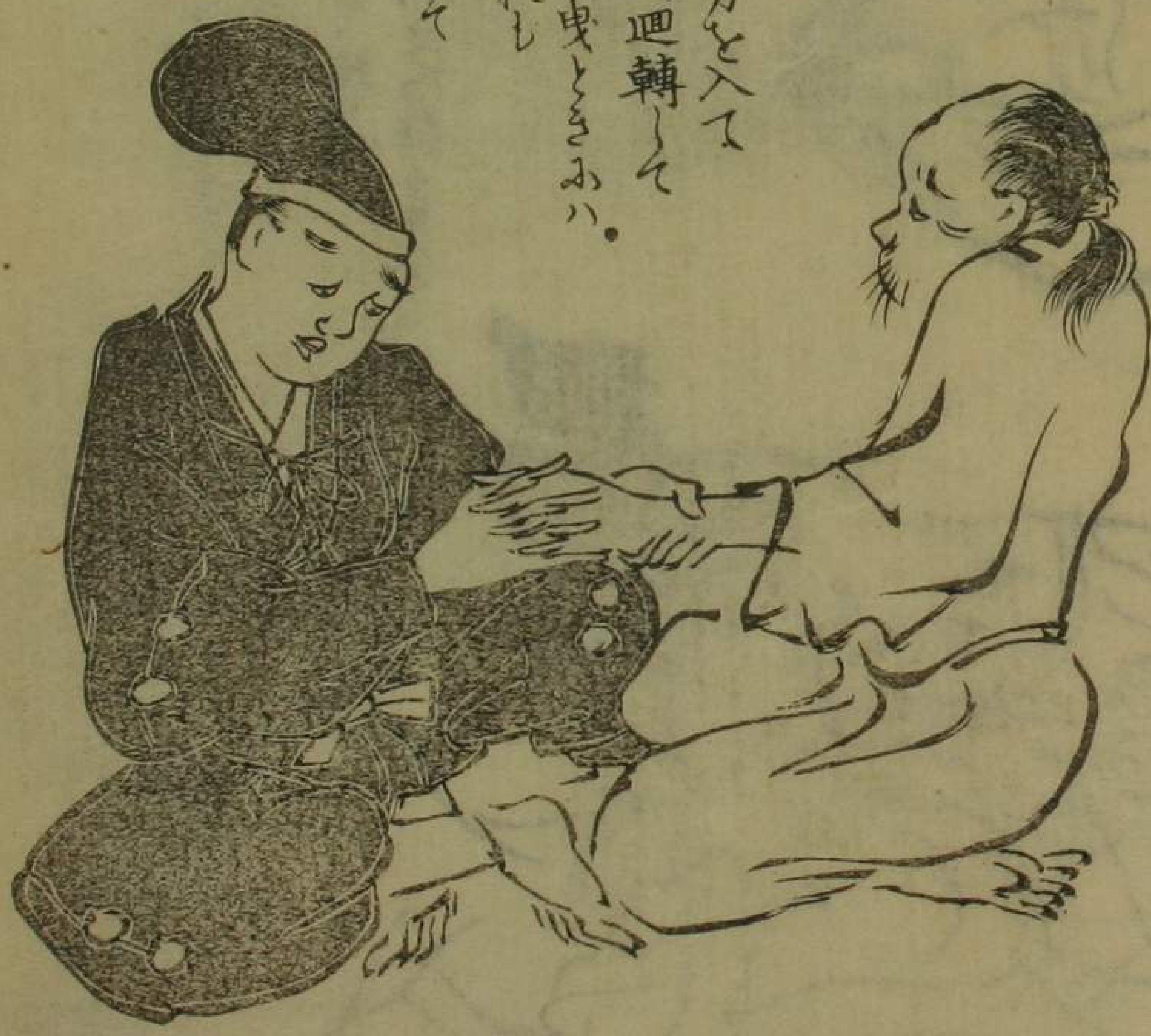
患者の體を
人にしつととらへさせて。
ありあふ棒を以て。
その布を力を入て
折ときには筋伸て。
たちまちなほる也。
これも手法ハ
前に同しけれバ。
こゝにハ
この図を
出して。
曳ときハ
うつるものなる
ことを
示せるなり。

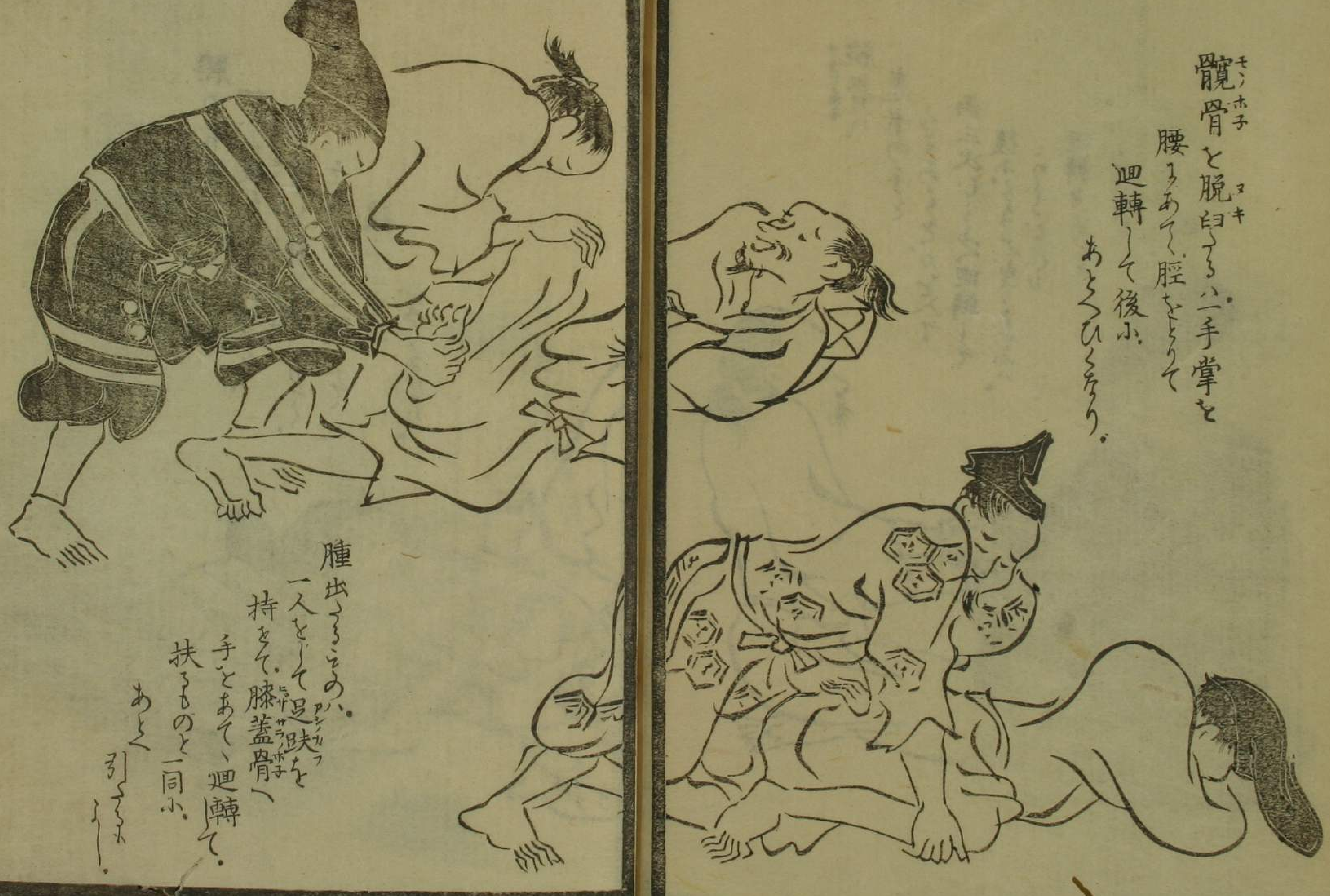


前の肘（カヒナ）を。
いくれおとく
一手掌（カタヽノテノヒラ）を胸（ムネ）に
あてゝ
曳せおさ
いるゝなり。



腕骨（テクヒホネ）ハ。
患者の手と
くみあはせて力を入て
両三次むかふへ廻轉して
後ふところへ曳ときには。
このうごきも
廻轉をほどして
ひきても
いるゝ也。

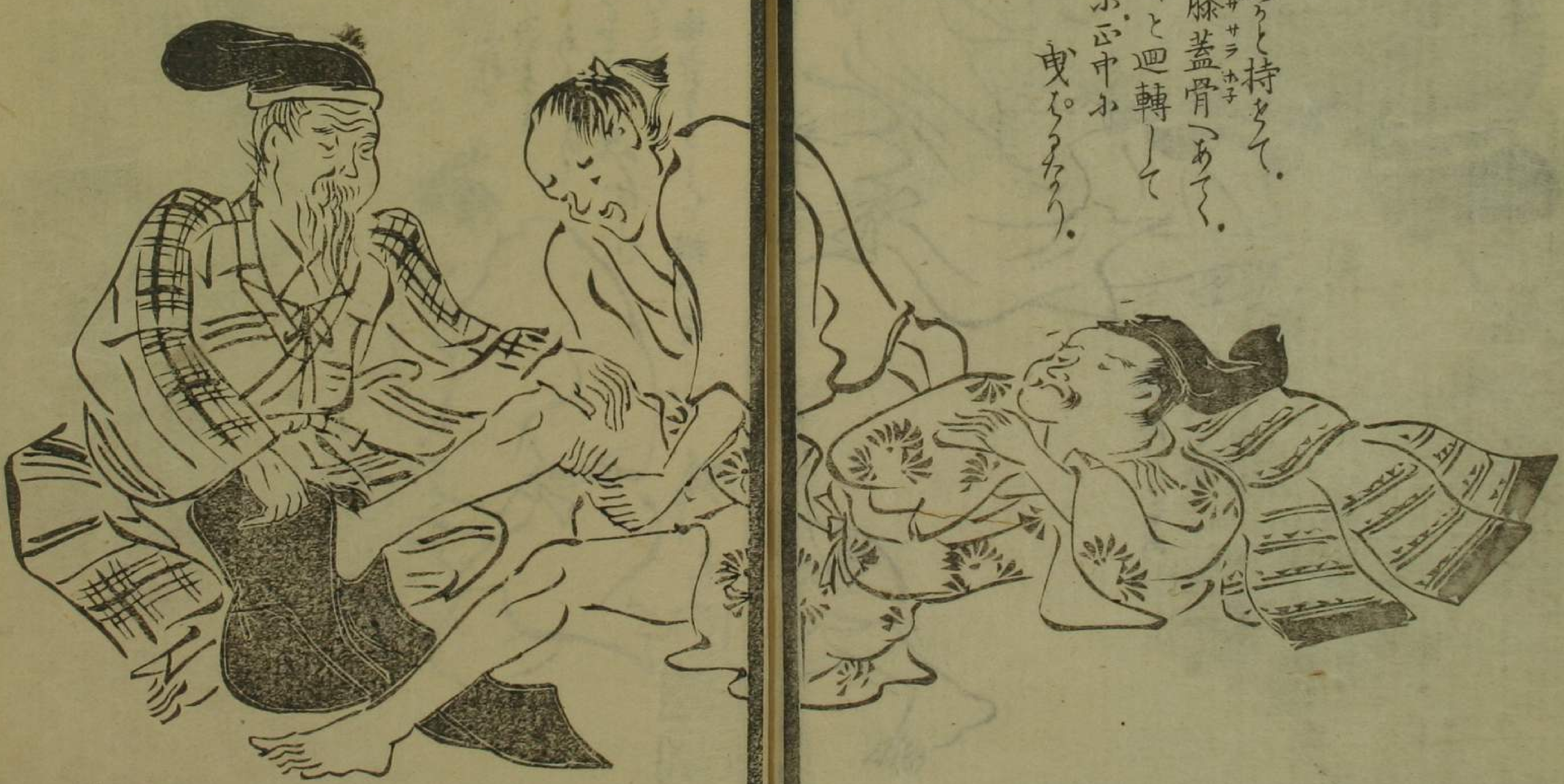




髖骨（モゝホネ）を脱臼（ヌキ）するハ。手掌を腰にあてゝ脛をとりて迴轉して後に。あとへひくなり。

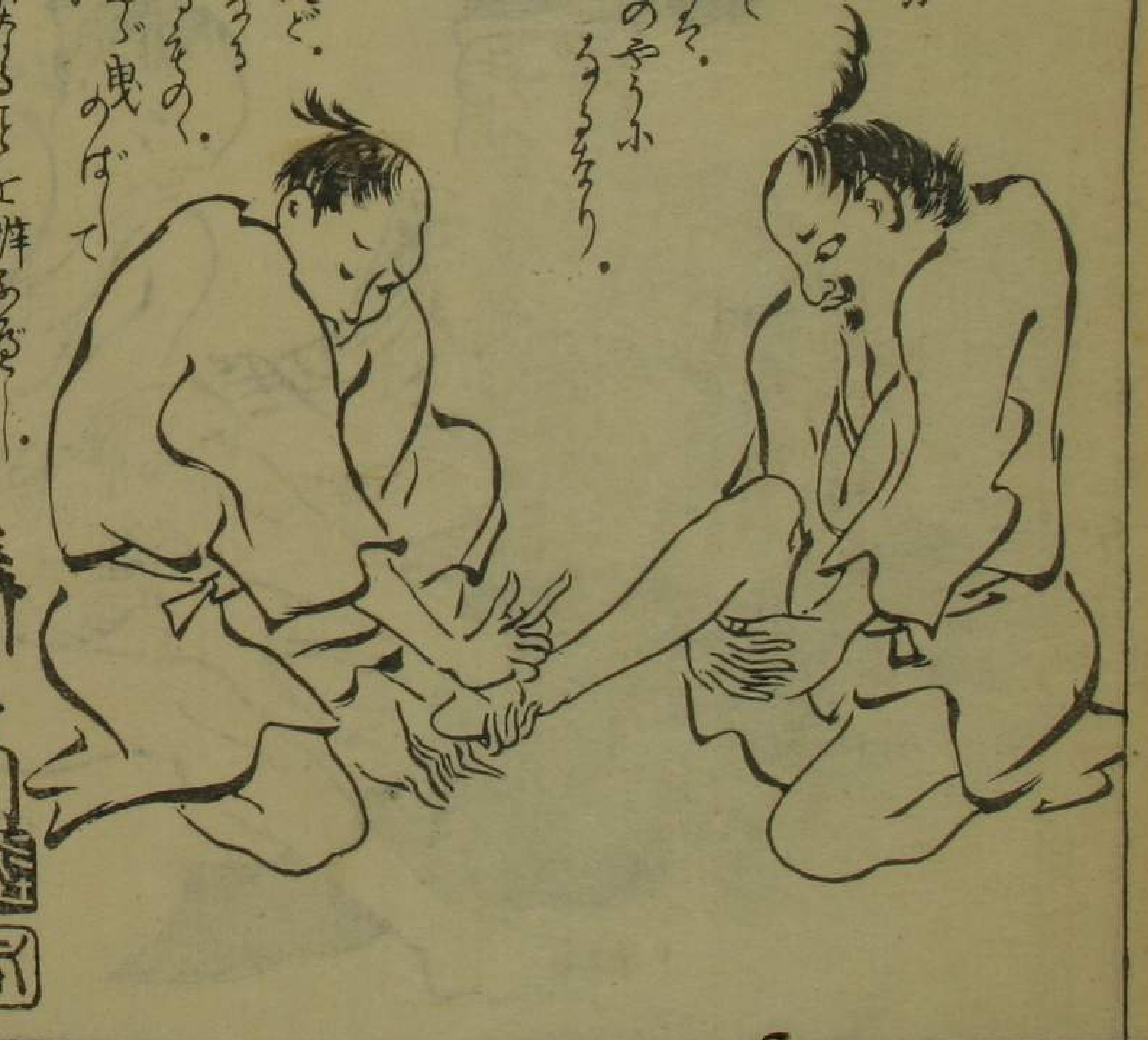
腫出するものハ。一人として足趺（アシノカフ）を持せて。膝蓋骨（ヒザノサラノホネ）へ手とあて、迴轉して。扶るものと一同に。あとへ引するべし。

膝の骨は。
一人に股を志かと持せて。
手掌（テノヒラ）を膝蓋骨（ヒザサラホネ）へあてゝ。
そろ〳〵と廻転して
後に。正中に
曳なるなり。



足踝（カヽト）の骨も。
手腕を治する法に
同じくむかふへ
まつしぐら
うしろへ引て
伸すときハ。
忽もとのやうに
なるなり。

以上九圖。骨の状ハ同じからざれど。
ことごとく皆白の巾くだかるる
ところへもつてあるその。
ひちがひするを。よく見のばして
正直になほるのこが。
接骨（ほねツギ）の極旨なることを辨ふべし。



隣春圖

嘉永癸丑冬新鐫

軍陣備要救急摘方

芄蘭舎蔵

定價銀三匁